

## 第6回

# 「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」 シンポジウム

防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり

と き・2017年3月19日(日)

ところ・高知城ホール4階 多目的ホール



公益社団法人 高知県自治研究センター



# 第6回「3.11 東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウム ～防災を通して学ぶ 新しい時代の生き方とまちづくり～

2017年3月19日（日）13:30～ 【入場無料】

高知城ホール 4階 多目的ホール

東日本大震災後、高知県内各地、特に地震津波防災に対する対策が大きく進みました。

沿岸部の市町村では津波避難タワーや避難道の整備が進められ、また、家屋の耐震化や家具の固定対策も進んでいます。さらに、学校教育においては、防災教育が積極的に進められ、児童生徒の防災に対する知識と行動力が身についてきました。

こうした中で、学校と地域が連携した取り組みが、学校教育と地域の防災力向上、さらにはコミュニティの再生強化に寄与する兆しが伺える事例が出てきています。

今回そのような観点から、防災を通じた地域コミュニティの再生と地域づくり、地域人材の育成について考えてみたいと思います。

※ 事前申し込みは不要です。どなたでもご参加いただけます。

講演①「いわての復興教育－いきる・かかわる・そなえる－」

岩手大学大学院教育学研究科〔教職大学院〕

岩手大学地域防災研究センター

准教授 森本 晋也 氏



講演②「地域を好きになる防災教育－子どもたちが地域をつなぐ－」

和歌山県串本町立古座小学校

教諭 林 宣行 氏



パネルディスカッション

「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」

森本 晋也 氏

林 宣行 氏

松本 敏郎 氏（黒潮町防災情報課長）



主催 公益社団法人 高知県自治研究センター（お問合せ 088-822-6460）

第6回「3.11 東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウム  
～防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり～

2017年3月19日（日）13：30～  
高知城ホール

1. 開会挨拶（13：30～13：40）

高知県自治研究センター 常務理事 石川 俊二

2. 講演①（13：40～14：40）

「いわての復興教育－いきる・かかわる・そなえる－」

森本 晋也 氏（岩手大学大学院教育学研究科[教職大学院] 准教授）

3. 講演②（14：40～15：40）

「地域を好きになる防災教育－子どもたちが地域をつなぐ－」

林 宣行 氏（和歌山県串本町古座小学校 教諭）

4. 休憩（15：40～15：50）

5. 第2部 パネルディスカッション（15：50～16：55）

テーマ「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」

パネリスト

森本 晋也 氏

林 宣行 氏

松本 敏郎 氏（黒潮町防災情報課 課長）

コーディネーター

畦地 和也 氏（高知県自治研究センター 理事）

6. 閉会挨拶

## 第6回 「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」 シンポジウム

テーマ「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」

2017年3月19日(日) 13:30～17:00

高知城ホール4階 多目的ホール

### 1. 開会あいさつ

(石川俊二高知県自治研究センター常務理事)

皆さん、こんにちは。3連休の中日ということで何かとご多用ではないかと思いますが、今日のこのシンポジウムにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。今日の主催者であります自治研究センターで常務理事を務めております石川と申します。主催者を代表して、一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

3.11から6年が経過をしました。いまだにその復興については道半ばということで、さまざまな課題が浮かび上がってきていると思っています。当センターでは、3.11を受けて、連続シンポジウムということで開催をしております、今回で第6回目になります。この2・3回は「事前復興」というテーマで、災害が来ることを想定して、その復興のために事前に何をしておかなければいけないかということを考える。そういった内容の企画をしてみました。

今日は第6回目ですが、「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」ということで、教育という切り口で少し考え合おうという、そういった企画にしてあります。

当センターでは、この連続シンポジウムと別に、「少子化対策を考える」という、そういった7回に及ぶ連続シンポジウムも開催をしてきました。その中でも教育という観点で、人口減少が進む中で県外に若者が流出をする、それをくい止めるために教育という観点から考えようという、そういった企画もしてきたわけですが、まさに関連する内容として、地域のことを知る、あるいは地域を好きになる、そういったことで子どもらの学びに合わせて我々大人もともに学んでいく、そ

ういったことが予測される災害への防災と復興に向けたプラットフォームづくりをしていくのではないかなというふうに思われるところであります。

今日は限られた時間ではありますが、どうか最後までよろしくお願いを申し上げまして、主催者のごあいさつとさせていただきます。どうか最後までよろしくお願いをいたします。



## 2. 講演①

### 「いわての復興教育 ―いきる・かかわる・そなえる―」

岩手大学大学院教育学研究科〔教職大学院〕岩手大学地域防災研究センター  
准教授 森本晋也氏

#### はじめに

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました岩手大学の森本と申します。最初に少しこの場をお借りいたしまして、東日本大震災の発災以降、高知の皆様にもほんとに多くのご支援をいただいておりますことに本当に心より感謝申し上げます。

私、震災の前の年度まで釜石の釜石東中学校の教員をやっております、防災教育に釜石で携わっておりました。ただ、震災が起きたときは、内陸の一関市の教育委員会にございまして、そちらで数日対応して、その後すぐに釜石に応援に入りました。そして、4月1日付から今度は大槌町教育委員会に異動になりまして、そこで学校再開を中心に携わらせていただいて、その後、半年ぐらいでまた一関に戻りますが、その後、岩手県の教育委員会に異動になって復興教育・防災教育を担当して、昨年4月に人事交流ということで、今度は岩手大学で今お世話になっております。

特に大槌町も壊滅的な被害を受けて、私は学校再開に向けて携わらせていただいたんですが、ほんとに全国から多くのご支援というのが、あの大変な状況の中で復興に向けての心の糧といいますか、ほんとに勇気づけられましたし、子どもも地域の方もほんとに何とか復興に向けてというエネルギーをいただきました。今も全国の自治体の応援で、岩手は復興に向けて成り立っているところがあります。本当にこの場をお借りして、改めて御礼を申し上げます。ありがとうございます。

#### 発災時の避難状況と直後の児童生徒の自発的行動

今日は「いわての復興教育」ということで、現在の岩手の状況、災害の発生時に子どもたちがどのように生き抜いていったかとか、そして、岩手は「いわての復興教育」というのを推進するんですがその内容について、そして、岩手県内の取り組みの様子についてご紹介させていただければと思います。

震災直後の大槌町の様子です。大槌は、津波の後に火災も発生しまして、役場も被災し、町長さんをはじめ多くの役場職員の方も被害を受けられるんです。私は当然戦後生まれなので空襲というのを知らないんですが、大槌にいたときに町が焼けただれていて、もしかして空襲っていうのはこういう状況を生むんじゃないかというような感じでした。そして、ちょうど先週3月11日、大槌に行っていました。6年経って盛土の上ようやく住宅とか事業所が建ち始めたという状況です。

私が以前いた釜石東中学校の学区も壊滅的な被害を受けられるんですが、ようやく復興住宅とかそういった町が徐々にできてき





ているというところです。陸前高田市も大きな被害を受けたんですが、ほんとに高い盛土ですね、山を切り崩してどんどん運んできた土を今ようやくかさ上げ工事が行われているというような状況です。今から6年前の3月11日午後2時46分にあの東日本大震災が起きたわけですが、岩手県も多くの被害が出ました。

そのとき襲った津波の様子、私がいた釜石東中学校の学区を襲った津波の映像を見ていただければと思います。

(映像を流す)

奥にある白っぽい建物が学校です。右端に鶴住居駅があって、右側に市街地があったんですが、その市街地もすべて津波がのみ込んでいった状況です。

この鶴住居というのは、私が前いた釜石東中学校区ですが、大槌湾ですね、なので、先ほど見ていただいた大槌の町とこの鶴住居地区、明治や大正のときと比べてもはるかに大きな津波が押し寄せてきて、甚大な被害が出たところになります。たまたま鶴住居駅から避難して隣にあったビルに逃げた方がちょうど学校のほうを撮った写真がありました。学校の校舎の4階部分以上だけがもうほんとに何とか、校舎自体は3階まで被害を受けたという状況でした。鶴住居小学校と釜石東中学校というのは隣同士にあったんですが、小学校の3階に車が突っ込んでいた様子でした。

このときにどのように避難したか、インタビューに答えた生徒のビデオがありますので、ご覧いただければと思います。

(映像を流す)

これは内閣府が作った津波防災の啓発用のビデオですが、あれだけの津波が押し寄せるところをほんとに中学生、小学生、地域の方々に避難したと。先ほどの女の子は、あの大きな揺れがあったときに学校の校門を出ようとしたところだったようなんですが、ああ、これだけ長い揺れが起きている、これだけ大きな揺れがある、これはプレート海溝型の地震だ、だから津波が来る、だから避難しなきゃいけないというふうに思ったと後に語っていました。

そして私は、かつての教え子、当時の中学生、今ちょうど大学生ぐらいになっているんですが、ずっとインタビューをして歩いて回っているんです。ある生徒はあの大きな揺れのときに、これは津波が来る、だから逃げなきゃと思って、すぐに体育館から外へ出た。波打っているようなところを逃げたという生徒もいます。ある生徒は、実は先生、私グラウンドで部活動の練習していて腰抜かしたんです。友だちが手を差し伸べてくれて起き上がった。その後、頭が真っ白だったんだけど、気がついたら走っていたんです、体は覚えていたんですと言って高台に行ったという生徒もいました。

ある生徒は、今ご紹介のあった逃げた避難路のところで2回目に逃げた場所があるんです。1回目に逃げた場所がけ崩れがあるからといって、さらに高台に2回目に逃げた場所があるんです。そこにちょうど上がったところで、みんなで移動していたら後ろのほうの生徒たちがバァーッと坂を上がっている。何事かと思って見たら、津波がグァーッと押し寄せてきている。もうまるで黒い壁のような、映画のワンシーンのようだったという生徒もいました。

その状況の中で後方ですね、海のほうを見たら、道路がちょっと下がるんですが、下のほうに保

育園の先生が1人で小さな子どもを3人ぐらい連れている。さすがに中学生もそれを見て「やばい」。そのときに、ある女の子は、私たちは今まで助けられる人から助ける人へというのを勉強してきている。今なら戻っても間に合うと思って、下へバッと下がったと言っていました。そして、保育園の先生に「小さな子どもを私に貸してください」と言って抱きかかえて、その女の子は高台のほうに上がっていく。

しかし、今度坂がきつくてだめだと、この大変な坂を私とその中学校2年生の女の子と2人で体力的に難しいかもしれないと思っていたら、友だちのお父さんがいた。私よりも体力のあるこのお父さんに頼んだほうがいいと一瞬で判断して、「この子をお願いします」と言って渡してとにかく逃げた。

もうほんとにその避難したときの様子を聞くと、そういうさまざまな状況の中でも一瞬の中で、何とかして生き抜かないと、そして自分だけが助かればいいんじゃないなくて、みんなの命が助からなければいけないんだというのが頭にあったと言っていました。ほんとにそういう状況の中、釜石東中学校だけじゃないんですが、いろんなところで一瞬の判断を余儀なくされながら逃げ切った、避難したという子どもたちもたくさんおりました。

この震災、ほんとに岩手県大きな被害が出たわけですが、沿



**【本日の内容】**

- 1 はじめに
  - (1) 災害を生き抜いた子どもたち
  - (2) 復興への希望となる子どもたち
- 2 「いわたの復興教育」とは
  - (1) 復興教育の考え方
  - (2) 復興教育プログラム
- 3 県内の実践例
  - (1) 「いきる」「かかわる」実践例
  - (2) 「そなえる」実践例
- 4 おわりに

お詫び 配信資料は、「いわたの復興教育」に関わるものが中心になっております。収録時間は、PDFでの紹介のみとさせていただきます。ご了承ください。

**あの日あの時 人間の想像を遙かに超える自然の力**  
 平成23年3月11日(金)午後2時46分  
**東北地方太平洋沖地震(東日本大震災津波)発生**

東日本大震災	前代未聞の甚大な被害
発生日時 2011/3/11	奪い命
震源地 三陸沖	日常の営み
震源の深さ 24km	幸せな時間と空間
マグニチュード 9.0	
最大震度 震度7	
地震の種類 海溝型地震	
死者数 5,061 (4/30現在)	
行方不明者数 1,150 (4/30現在)	
負傷者数 209 (4/30現在)	



岸部は非常に大きなダメージがありました。しかし、その中でも例えば右の下を見ていただきたいんですが、「希望」という、これは大船渡第一中学校の生徒会が「一中生に、声をかけて下さい！何でもします」というタイトルの新聞を作って、あの震災の直後からこれを地域に配って、私たちにできることをやりますというふうに声をかけます。

もちろんここも大船渡ですから被災をしているところなんですが、生き抜いた子どもたち、例えば、私が釜石に入ったときには、高校生の教え子たちが避難所だとかそういうところで懸命に働いていた。中には、手を真っ赤にしなが配給ができるように自分たちにできること、自分に食べ物なくても高齢者の方や小さな子どもを優先して配ったというような話も聞きました。ある高校の生徒たちは、夜寒くても、自分たちは毛布がなくても、地域の高齢者の方や子どもたちに毛布を渡したという話を聞いております。

これだけの大きな被害が出た中で、盛岡の視覚支援学校の生徒さんたちも、自分たちにできることは何かないかということで、仮設住宅を訪問して琴の演奏をしたり、あとは内陸部の中学生、高校生になると沿岸部に行ってボランティア活動をしたり、地域の人たちを励ますための伝統芸能であったり、運動会であったりというような取り組みが、被災が比較的少ない内陸の子どもたちも、自分たちにできることは何なのかっていうことを問いかけて、さまざま生きていくうえでの大切な学びというのが生まれたような気がいたします。

3月23日の岩手日報の新聞ですが、3月11日の翌日に被災のあった宮古でスーパーが、物資を求める人たちに食べ物を売る。そのときに「パンは1人1個まででお願いします」と言うんですけど、そこへ来た大人たちは「いや、もっと買いたいんだ」とかいろいろ声を上げて、なかなか不満の声が出る。そこに高校生がボランティアとして入って、「パンは1人1個までにしてください。水は何個までにしてください」。高校生のこの声で、声がかけて大人たちは我に戻って、「分かりました。1人1個までに従って買います」というような姿も見られたといわれています。

## 大槌町の復興の第一歩は学校再開

私は大槌町に行って、学校再開に携わるんですが、大槌町では小・中7校あって、そのうちの5校の校舎が使えなくなりました。高台にあった校舎の小学校1校、中学校1校だけが何とか使える校舎です。残り5校が使えない状況の中で、体育館に仕切りをして、教室にして学校を再開します。

このときに大槌町教育委員会では、とにかく学校を1日でも早く再開しよう。その一番の大きなねらいは、当時の教育長にこう言われたんです。たとえ避難所からでも、子どもたちが「学校に行きます」という一言声をかけて学校に行く。いわゆる日常を少しでも取り戻す。これが大人たちにとって復興に向けての励みになるんだと。学校が再開するということは、子どもたちの学び



の保障だけではなくて、あの大変な状況の中で大人たちが「よし、子どもたちも学校に行っている、子どもたちが勉強している、おれたちも頑張らなきゃというふうになっていくから、とにかく学校を再開するんだ」というのが、このときの大きな目標でした。

子どもたちはほんとにいろいろな支援を受けながら、音なんかも当然わいわい聞こえるんですが、その中でも一生懸命勉強する姿が見られました。そこにはたくさんの支援もいただきながら、そういった中で子どもたちのこういった学びが再開するという状況でした。

このときに、体育館の中を見たら、大槌北小学校の児童会の子どもたちがこんなことをスローガンとして書いてたんです。「明るい笑顔で、明るいあいさつ。生かされた命を大切にし、1日1日をしっかりと歩む」。生かされた命を大切に1日1日をしっかり歩む。もうほんとにこの言葉に自分自身も励まされて、やれることをやらなければ、頑張らなければというふうに思ったのを記憶しております。

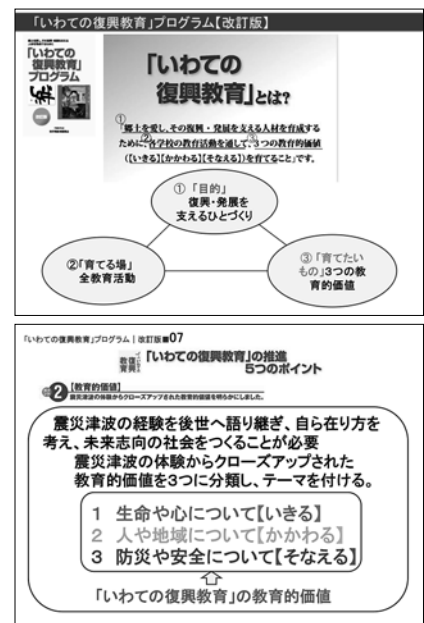
県の教育委員会で震災の後、もう一度、教育をどうやっていくかっていう見直しになったときに、実は改めてそういった子どもたちの姿から、やっぱり教育にとって大事なことは何なのか。やっぱりそれは「人づくり」なんだと。この震災の大変な状況を乗り越えて、そして未来を創造していくために、そして10年後、20年後、もっと先の岩手や日本を支えていける子どもたちの育成というのをやっぱりしていかなきゃいけないんだと、子どもたちの姿から改めて教育の重要性というのを学ぶ。やっぱり人づくりが私たちの一番の大事な部分なんだと。

そして、当時の教育長は、「ほんとに大変でつらい状況だったけども、そういった子どもたちの姿やお互いにいろんなことに気づく中で大事なものをやっぱり学んでいる。それが教育的価値だ。そして、それを大事にして復興教育というものに取り組んでいこう」というふうに県の教育委員会では考えます。その後、岩手としてどういう教育をやっていこうかということで、プログラムも24年度、25年度、改良を重ねながらやっているところです。

## 「いきる」「かかわる」「そなえる」を3本柱に

この「いわての復興教育」についてですが、このように県としては考えました。郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する。そのために、各学校でいろんな教育活動を通して、改めてこの震災で大事にしていかなければいけない3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」、これを育てていこうと岩手県では考えました。

その「いきる」「かかわる」「そなえる」とは何なのか。この震災の体験でいろんなことを学んだわけですが、私もその渦中にもいたんですが、それをみんなでもう1回整理して大事なものを絞り込みました。その絞り込んだものが「いきる」「かかわる」「そなえる」。「いきる」というのは、改めて生命、命の大切さであったり、心のあり方だったり、心身の健康、これを「いきる」というふうにしよう。もう1つは、この経験の中で人のきずなとかつながりの大切さ、地域づくり、そして社会



に参画してこの社会をつくっていく。人や地域について「かかわる」。そして、最後の「そなえる」は防災、安全です。この「いきる」「かかわる」「そなえる」、この3つを子どもたちにもう1回きちっと育てていこう、大事にしていこうと。

その1つずつに、さらに具体的に学校が分かりやすいように、「いきる」っていうものには、例えばかけがえのない命だったり、自然との共存であったり、価値ある自分、例えば4番目には夢や希望の持つ大切さであったり、やり抜く強さ、あと心の健康、体の健康というふう具体的に7つの項目を設定しています。

「かかわる」については、家族・仲間・地域の人々とのつながり、県内外・海外の人々とのつながり、ボランティア、自分と地域社会、そして自分たちがこの地域をつくっていくんだと、地域づくり、今日のテーマにかかわるところですね。郷土の美しい自然、伝統行事・郷土芸能、温かい人のつながりのある社会、安全なまちを願い、この地域づくりに子どもたちがかわわっていこうという、こういった項目を考えました。

そして、最後の「そなえる」というところは、自然災害のメカニズムとかライフラインだとか情報とかもあるんですが、今日のテーマとかかわる部分でいけば、学校・家庭・地域での日ごろの備えを大切にしていこうということ具体的な項目として挙げて、そして各学校には、こういった考え方を学校経営にきちっと位置づけて各学校で推進してくださいと。各学校はいろんなものをもう既にやっています。なので、決して新しいものをやるのではなくて、今まで地域の人たちといろんな行事をやったり、キャリア教育・生き方の教育をやったり、道徳教育をやったり、ボランティア

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 08

【いわての復興教育】の推進 5つのポイント

3 【教育的価値一覧表】  
3つの教育的価値と具体の21項目からなる教育的価値一覧表を作成しました。

「いわての復興教育」における3つの教育的価値と具体の21項目

教育的価値一覧表	
3つの教育的価値	具体の21項目
1 生命や心について【いきる】 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①～⑦
2 人や地域について【かかわる】 震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画	⑧～⑭
3 防災や安全について【そなえる】 震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全	⑮～㉑

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 08

3つの教育的価値	具体の21項目
1 【いきる】 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①【かけがえのない生命】 全ての生命は、かけがえのないものであることを実感し、大切にすること。
	②【自然との共存】 自然の恵みや美しさに感動する心と畏敬の念をもち、自然と共に生きることについて考える。
	③【価値ある自分】 どのような状況においても、自分の存在を認め、必要とされる存在であることを認識する。
	④【夢や希望の大切さ】 夢や希望をもつことは、生きる価値を見出すことであり、つらく厳しい状況を乗り越えられることにつながることを実感する。
	⑤【やり抜く強さ】 救済活動などに従事した人々の働きと苦勞を通して、どんな状況においてもやり抜く強さについて考える。
	⑥【心の健康】 つらいことや悲しいこと、環境からくるストレスなどを感じた時の対処方法を学び、自分自身で心の健康を維持する。
	⑦【体の健康】 周囲の環境を理解し、状況に合わせて安全に気をつけて遊んだり、運動したりする。

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 09

3つの教育的価値	具体の21項目
2 【かかわる】 震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画	⑧【家族のきずな】 安心して生きていくための生活基盤として、家族の絆や家族の一員としての喜びを実感する。
	⑨【仲間や地域の人々とのつながり】 幼児や高齢の人々・障がいのある人々等と一緒に生活している地域社会において、互いに支え合う仲間の大切さや地域の方々のありがたさを実感する。
	⑩【県内外や海外の人々とのつながり】 苦しみや悲しみに包まれている人々を支援している人々に感謝し、共に協力することの大切さを実感する。
	⑪【ボランティア】 他の人や地域社会に役立つことを自分から進んで実践し、他人の喜びを自分の喜びとして共感する。
	⑫【自分と地域社会】 自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と地域社会との関係について考える。
	⑬【地域づくり】 郷土の美しい自然、伝統行事・郷土芸能、温かい人のつながりのある社会、安全なまちを願い、地域づくりにかかわる。
	⑭【復興・復興へのあゆみ】 震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復興・復興の状況を調べ、安全で生き生きしたまちづくりにかかわる。

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 09

3つの教育的価値	具体の21項目
3 【そなえる】 震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全	⑮【東日本大震災津波の様子と被害の状況】 平成23年3月11日に発生した、東日本大震災津波の様子と被害の状況について理解する。
	⑯【自然災害発生のメカニズム】 自然災害が発生するメカニズムやそれぞれの災害について理解する。
	⑰【自然災害の歴史】 過去に起きた自然災害や自然災害と共存してきた人々の努力や工夫などについて調べ、防災・減災について理解するとともに、次の世代へ語り継いでいく。
	⑱【自然災害のライフラインへの影響】 震災津波の被害による教訓をもとに、水、電気、ガス、灯油、ガソリン、道路などの供給・輸送システムやその大切さを理解し、ライフラインが止まったときに対応できるようにする。
	⑲【災害時における情報の収集・活用・伝達】 震災津波の被害による教訓をもとに、情報の大切さ、情報の収集、選択・判断、発信の方法などについて理解し、活用できるようにする。
	⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】 避難場所や避難方法、避難経路を把握して、安全に避難する。家具の安全対策、避難の方法や落ち合う場所、非常時持ち出し品、放射線についての正しい理解など、学校や家庭でできる防災対策を行う。地域の防災システムを理解し、防災活動に参加する。
	㉑【身を守り、生き抜くための技能】 危機を予期(回避)し、災害や事故に直面した際に自他の体を守り、被害を最小限に止め、非常時に生き抜く技能を身に付ける。(応急手当や心肺蘇生法、食中毒防止、衣食に関すること、放射線対策等)

とかやっている。今までやっているものをもう1回この震災の教訓を踏まえて見直して、自分たちの学校や地域の実情に応じた復興教育を展開してほしいということで各学校にお願いをして推進してもらっているところです。

参考となる本、副読本ということで、小学校低学年・小学校高学年・中学校用というのも作って、副読本も活用しながら学校には復興教育を推進していただいているという状況です。

これを沿岸部はもちろんですが、被害の少なかった内陸部も含めて全県で取り組んでいこう。そして、これを全県の子どもたちが学んでいくことで、この東日本大震災の経験を後世にも語り継いでいくし、その中で自分はどうかあればいいのか、そして未来志向の社会をつくっていければということで進めているところです。改めて、先ほどの「いきる」「かかわる」「そなえる」というのはよく考えれば特別なことではなくて、私たちが生きて、人間が生きていくうえではほんとに普遍的な価値で大切なもので、子どもたちの生涯にとって大事な生きる力になるのではないかと。こういった活動で、今求められている思考力や判断力、表現力なんかもついていくというふうに進んでいるところです。

こういったものを推進していくために、県では防災教育研修会とか復興教育研修会とかいろいろやっていました。防災教育研修会をやるとき、今までは先生方だけを対象にしていたんですが、震災の後は、学校の先生だけではなくて、市町村教育委員会とか市町村の防災担当の人にも入ってもらって一緒に図上訓練なんかもやって、どんな課題があるか、連携していくためにはどうしたらいいかっていうふうに、学校と行政と地域が繋がっていくきっかけになるような研修にしていこうということで、研修会も切り替えて推進しているところです。

あと、復興教育を推進していくために指導、各地域の先生方の研修を推進していくためのリーダー的な方を育てる研修もやれば、小・中学校の担当者を全員集めて、教育事務所ごとに担当者研修

「いわての復興教育」プログラム 改訂版 10

【学校経営への位置付け】

「いわての復興教育」を、「学校経営の基本方針」や「経営の重点」に位置付ける形での考え方を示しました。

学校経営の基本方針 / 重点への位置付け

学校教育目標

学校経営の基本方針

復興教育の目的

経営の重点

教育的価値一覧表

3つの教育的価値	具体的21項目
1【いきる】	①～⑨
2【かかわる】	⑩～⑱
3【そなえる】	⑲～㉑

「いわての復興教育」の展開

「いわての復興教育」プログラム 改訂版 11-12

【教育活動の組み立て方】

「基本的な組み立て方」「指導の観念」を明示しました。

2 基本的な組み立て方

3 指導の観念

教育活動の展開	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 学校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 学年	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3 学期	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

「初版を参考に！」

「いわての復興教育副読本【いきる かかわる そなえる】

※ 3つの教育的価値と具体的21項目に対応

いきる かかわる そなえる

小学校・低学年用

いきる かかわる そなえる

小学校・高学年用

いきる かかわる そなえる

中学校用

「いわての復興教育」を全県の学校が取り組む意義

地域にかかわらず、本県全ての子どもたちが、「震災津波の経験を後世へ語り継ぎ、自らのあり方を考え、未来志向の社会をつくること」ができるようにする。

- 東日本大震災津波から得られた教育的価値【いきる】【かかわる】【そなえる】は、人間が生きていく上で持つべき普遍的価値と重なるものであり、その獲得は子どもたちの生涯にわたっての生きる力となる。
- 活動や取組によって、「思考力・判断力・表現力」の育成につながり、どんな場面に遭遇しても対処できる応用可能な力となる。

おわりに～釜石中元生徒への聞き取り調査から～

- 美容師になるのが、夢。そして、故郷で美容室を開き、地域の人たちが集える場所にしたい。
- 建築士になって、故郷の復興に携わってきたい。
- 以前から看護師になりたいと思っていた。震災があったのでその気持ちは強くなった。故郷は高齢化も進んでいる。地域医療に尽くしたい。
- 自分は、以前から農業に興味があった。自分の希望する農政に関わる仕事に就きたいと思っている。でも、故郷から離れてしまう。ただ、災害が起きた後、農業をできるだけ早く再開できるようにしていきたい。

会なんかも開いて、これを推進しているところです。

## 児童生徒を中心としたさまざまな復興教育

続いて、岩手県内で具体的にどんな取り組みをしているかというのをご紹介させていただきます。

津波で学校も被災した岩泉町の小本小学校です。かけがえのない命を学ぶのにこういうやり方もあるんだと私も勉強になったんですが、養護教諭の先生が保健指導の中で、小学校1年生から6年生までこんなに身長伸びたんだ、こんなに体大きくなったんだというのを実感するときに、家族から、あなたを育ててくるために家族の思いなんかも子どもたちに伝える。子どもたちからすると、自分って大事にされて育ってきたんだ。それをすごく実感できる。自分の命も大切にされているけど友だちの命も同じように大切なんだということで、改めて命の大切さだったり、自己肯定感を子どもに持たせるというような取り組みがあります。

今回被災の大きかった大槌町で、イトヨという魚がいるんですが、清流じゃなきゃ生きられない、あの津波で全滅したと思ったんです。そしたら、あの津波が押し寄せて引いた後にイトヨが生き残っていた。ほんとに奇跡なんです。そして今大事に大槌でこのイトヨを育てているんですが、これを教材として副読本にも入れて、こういったところから命の大切さとか自然とともに生きる心情を育てる。こういう授業を小学校の低学年の道徳でやっていただいたりしています。

これは洋野町の角浜小学校。洋野町というところも沿岸部に面していて被害は少しあったところですが、磯掃除ということで、ツブを取ったりとか、あと海岸掃除をしたり、それでもうちちょっと学年が上がると震災のことを勉強して、そしてみんなで復興に向けてどういうふうにやればいいのか話し合いをすとかしています。

あとは野田中学校、ここも海に面して被害が大きかったところですが、仮設住宅が学校のグラウンドにできたんです。震災直後、生徒たちはふるさとへの思いを大事にして、いろんな花をプランターに植えたりとか、仮設住宅の方々に壁掛けを贈ったりとかするんですが、その後、社会科の授業なんかを使って、自分たちが住民としてできることを考えようと。例えば、当然復興に向けてはお金も掛かる。その財政の問題も考えよう。そして実際、さらに発展して、地域で復興のメモリアルパークができる。じゃあ自分たちもその公園の計画づくりにかかわって、そして地域の人たちに、行政にも意見を言っていこう。ということで、学校と行政と関係機関が連携して、さらに子どもたちが復興まちづくりにかかわっていくというような展開をしています。

ちょうど野田中学校、ボランティア活動とかこういった活動を熱心にやられるんですが、岩手県のミニ広報に出ましたので、少しご覧いただければと思います。

(映像を流す)

野田中学校の生徒たちのスローガンが「野田村の太陽になろう」。村の主要部分は津波で被害を受けて、仮設住宅も中学校の中にできるわけですが、その中で自分たちが太陽になろうというふうにして、復興に向けて自分たちにできることというのを頑張っていました。

少し付け加えてお話しさせていただきたいのは、やっぱり心のケアです。これは非常に大事な問題で、岩手県では復興教育とともに心のケアというのは大事にしているんですが、私も野田中学校

の心のケアの授業を参観させていただいたんです。

そのときにある中学生が、カウンセラーの方とか、あとは奥尻島で体験された方と交流する。やっぱり自分の心の奥の中にとどめていたものが出てきたんです。ある中学校3年生の女の子は泣きながら、私は被災者じゃないとずっと自分で思ってきた、それは自分の家が大丈夫だったから。しかし、目の前でふるさとがなくなった。涙ながらに、「私も被災者と言っていいんでしょうか」というふうな声でした。

やっぱり子どもたちにとって、目の前でふるさとが津波にのまれるというその衝撃、だけど、自分の家は大丈夫だった。だから、家も流された方々が被災者で、その方々のために何かをしなければというふうに一生懸命やってきた。だけど、目の前であの状況を見て、ふるさとが失われた私も被災者と言っていいんでしょうかと涙ながらに語り始めた生徒がいて、そういった奥底にあるものを出しながら、これからどうしていくかというのが大事なところで、そういった心のケアでそういった場面もあったという生徒たちでした。

それと、そういうものをしながらこういう前に向いてやっていく。この両方でやってたということちょっと補足で付け加えさせていただければと思います。

あと、内陸部のほうでもいろんな取り組みがあります。これは滝沢市というところで岩手山の近くのところですが、岩手山は噴火の危険性が現在もあるんですが、活火山なんですね。自分たちのふるさとの防災について学ぼうということで、この岩手山について知ろうと。ただ、子どもたちには、この岩手山、火山がくれるいろんな恵みも学習しながら、かつてどういう噴火があったのか、噴火するとどんな危険があるのか、そしてどういうふうに自分の身を守ればいいのかというのをずっと学習して、最後は宮沢賢治の『グスコーブドリの伝記』を交えながら、そして災害で身を守るために自分たちが学べたことを家族の人にも伝えたいという思いで劇を発表する。

5・6年生は、内陸部なんですけど沿岸のことをやっぱり学ぼう。「未来をつくる絆～私たちの震災復興～」というテーマで、自分たちで震災について学びたい課題を出してテーマを決めて、実際に釜石の鶴住居地区に行って、そして鶴住居で復興に携わっている方々に話を聞いたりインタビューしたり、そして戻ってきて、自分たちに何ができるか。ここはやっぱり大事なんだと思うんですが、どんな岩手県にしたいのか、そして今後自分たちに何ができるのか、そして自分たちはどう生きていけばいいのか。その生き方についても意見交換会をやった。そして実際、滝沢で釜石の海産物を買ってその収益を寄贈するとか、そういう一連の取り組みをやっているという学校もあります。

あと、これも同じく岩手山に近いところですが、八幡平の西根中学校では、内陸の学校が沿岸に行ってボランティアをするってよくあるんですが、どうしても1年に1回行ったら終わってしまいますね。やっぱりなかなか宿泊を伴ってというので、中学生ですから学校行事としても宿泊研修を兼ねて1回行くと。しかし、この学校では考えたんですね。3年間行くんだしたら、同じところを3回行き続けよう。1年生、陸前高田市になりますけど、この学年が2年生になっても陸前高田市、3年生になっても陸前高田市、同じ地域を3回行こうと。卒業したら、次の新入生がそこに行くという、かわり続けるというボランティア活動をやっているというのでやってるんです。

このときの生徒の感想は、人のために何かをすること、優しさを学んだ、友だちを大切に部活や勉強ができるということに感謝して生活を送りたい。3年生ぐらいになると、仮設住宅の方々

に自分たちの合唱を聞いてもらったと、僕たちの合唱を聞いて泣いている方々もいたと。逆に自分が感動して、もっと自分たちにできることがないか、そういうことを探していきたいというふうに、やっぱり心の交流ができる中で、もっと自分たちが復興のためにできることはないかっていうような思いに至っていると。

復興教育としてはこれをやってるんですが、学校としてはもう1つ大事な部分があって、キャリア教育、生き方教育ということで、この八幡平の地域で地域の復興のために、地域づくりのために頑張ってる方々を招いての学習会もやってるんですね。沿岸部に対してはこれをやって、自分たち地域のことは、地域の方々に来てもらって自分の生き方を考えるキャリア教育、そして職場体験、そういったのも並行してやっているというところが非常に重要なところだと感じているところです。

続いて、災害医療・災害情報ということで、岩手医科大学には今一生懸命、震災の後、こういった学習を学校でもということやってくれていて、希望する学校には大学の先生を派遣してもらってるんですが、例えばこれ両方共通するんですがトリアージですね、こういったロールプレイをやったりとか、いざというときに医療の分野がどのように行われるのか。皆さんもご存じと思いますが、ほんとにあの状況の中で1人でも命を救うためにトリアージということで色分けをして、少しでも命が助かる可能性のある方々から救出、対応していく。

こういったことを学ぶということで、ある中学生はこんな感想を持っています。72時間というタイムリミットがある現場で、1人でも多くの命を救うために必死に医療にあたる先生方の姿を思い知ることができた。私も先生方のように人のために動けるようになりたいっていうふうに、自分もじゃあ何かいざというときにできるようになりたいって、こういった学習にもなっています。

続いて、これは一関市の本寺小学校というところなんですが、ここは岩手・宮城内陸地震が起きたところなんです。どうしても災害って、時間が経つとどんどん意識が低下してしまう。そういう中で、この6.14の記憶を後世にということ子どもたち、あと保護者の方々も巻き込みながら、このときのことを記憶を風化させることなく学習しているという様子になります。

続いて「そなえる」のほうに入っていっているんですが、これは宮古市の田老、旧田老町ですね、あの有名な防波堤があったんですが、それを津波が乗り越えてきて多くの犠牲の方も出てきたところなんです。今回のこの震災の教訓をきちっと伝えていけるようにということで、震災資料室「ボイ



ジャー」という名前で学校の中にこういう教室をつくっています。

そして、もう震災から今年で6年経っています。ということは、中学校1年生というのは12歳ですから、かつて6歳とか、ほんとに記憶がしっかり残ってないですね。やっぱりどうしても学年が下がると、子どもたちは震災のことも記憶に薄れてきています。その中で入学する

と、この震災資料室ボイジャー、そして先輩たちが残した当時の体験文集、こういったものを利用しながら、8歳時の状況はどうだったのか、その後、中学生とかどういう状況だったのかというのを学んで、そして自分たちなりに何を伝えていきたいか、そして地域のために何ができるのかという学習を進める。そのスタートをボイジャーで活用しているというお話でした。

自分もこのボイジャーに行ったら大事だなと思ったのは、あの津波があって、家も流された。そして、中学生は避難所とかに入るわけですね、家族とようやく巡り会って家に入る。当然学校は再開できないですよね。しかし、先生方はこう言っていました。あのもう瓦礫がいっぱいあって、もう自分の家も流されているのに、中学生が次々集まってきて、「僕たちにできることはないですか。僕たちが何かできることはないですか」って言って学校に来る。その来た子どもたちが例えば物資を運ぶとか運搬するとか、物を背負って、やっぱりあの状況の中で「僕たちにできることは何かないですか、先生」っていうふうに来た。そういったのをこの中でも伝えていて、やっぱり改めてそういった姿を伝えていく大事さというのを、ここで子どもたちは自ら学ぶような部屋になっているところですよ。

続いて、これは宮古市の川井小学校というところで、学校・家庭・地域が連携した防災ということで、ここは宮古市といってもほんとに内陸のほうにあって盛岡市と接するところで、ある意味北上山地の山の中にあるんです。この学校ではもう一度、沿岸のことは一生懸命勉強してたんですが、自分たち地域のことも見つめ直そうと、親子で地域の危険はどういうところがあるか予測したり、災害時にどうしたらいいか、保護者と子どもたちが学習訓練をしたり、そしてマップづくりをするんですが、いいマップだなと思ったのは、どこが危険かっていうその危険なことだけが入ってるんじゃないくて、自分たちの地域にはどんな豊かな自然があるのか、地域の自分たちの魅力は何なのか、そういった自分たちふるさとの大事な部分もたくさん入っているんですね。

子どもたちがこういうのをづくり始めたよ。そしたら、当時の校長先生が地域やPTAの方々に声をかけたところ、「いや、先生、だったら、もう子どもたちがほんとに安全で安心できるための委員会を設置しよう」ということで、防災・交通安全・防犯、そしていじめのことなんかも引くくめて、学校・家庭・地域が連携できる組織をつくらうということをつくった。

このときは県のお金があったのでこういうマップづくりができたんですが、この会合の中で地域の消防団から「いやあ、学校が中心になってこういういいことをやってくれてる。消防団としても



ももっとも協力していきたい。お金がないんだったら、おれたち出すから」というふうに声をかけてもらって、より地域とのつながりが深まったという話をされてました。そして、ここはこの間の台風10号でまた大きな被害を受けるんですが、さらにその台風10号の被害をこのマップの中に入れて、次の子どもたち、地域にも伝えていけるよう



に取り組んでいるというようなことでした。こういったマップづくりなんかも行われています。

あとは、これは内陸部の一関市立興田中学校ですが、「地域のハザードを知ろう」ということで、DIGですね、これをやっているところの様子です。そして、実際のフィールドワークをして、実際現地を回ってるときに、地域の方から「あっ、実はここには昔こんな災害があったんだよ」とか、いろんな交流がある。そして、さらに地域の方々にそのことを伝えようということで「防災ガイド」というものを作って、「ともに生きる」ということで防災の合言葉も入れて、地域の方々に配るといようなことをやっています。

こういったものも学習しながら、例えばこの地域ではシイタケ栽培が非常に熱心なんですけど、シイタケ栽培のことも学習したりというふうには、防災もやりながら、その地域の振興の学習、こういったこともやられているというようなところなんです。

あとは、学校・家庭・地域の連携で実践的な防災教育の取り組みということで、これは洋野町の向田小学校というところが取り組んでいる内容ですが、家庭・地域と連携したということで、例えば授業参観の日に保護者の人と子どもたちが一緒に避難訓練をするとか、町の防災アドバイザーの方に来てもらって一緒に勉強するとか、あと被災地の見学、田野畑村に行っているいろんなことを勉強するとか、あと災害伝言ダイヤルって、よく災害が発生したときにどのように連絡をとるかっていうので学習はするんですが、私1つアイデアとしていいなと思ったのは、子どもたちが災害伝言ダイヤルを活用して録音するんですね、それを必ずお家の人は家で聞くという、そういうことができるサービス機関というのがNTTは設定してあるんだそうです。

やっぱりこういうのがありますよというのはよくやりますよね。あと、訓練なんかで実際に災害伝言ダイヤルを試して入れてみるというのはあるんですが、それを家庭で再生して聞いてどうかっていうのをやる。こういう実際に家庭でやるっていうところまで踏み込んでやってみる。これはいいアイデアだなと思うところなんです。

あと続いて、私も県の教育委員会におりまして、高知県でもやられてると思いますけど、岩手県で、県レベルの総合防災訓練というのをやっているんですが、平成26年から新たな訓練項目に「学校・家庭・地域が連携した防災学習及び防災訓練」という新たな項目を入れたんです。それまで岩手県もどうしても知事部局がいる訓練は知事部局だけで進んで、必ずしも学校とか子どもとか保護者が入るといのはなかったんですね。

訓練をやっていただく市町村には、市町村教育委員会にもかかわっていただいて、学校にもかかわってもらおうと。なので、訓練のときには保護者の、例えばこの金ケ崎町というところでは、訓練の一環として保護者の人と子どもたちが避難場所、自分たちの地域の避難場所に必ず1回行くと。そして、学校に行って防災学習をするとか、岩谷堂小学校というところも親子で必ず避難場所を確認して学校に行って、学校で学んで引き渡し訓練をするとかっていうように、家庭と地域を巻き込む訓練をやっていたところなんです。

このときに中学校からは、さらに中学生なので、自分たちにできることは何なのか、将来の地域防災の担い手になるような学習をぜひしたいということで、学習、防災講話とかシェイクアウト訓練だけじゃなくて心肺蘇生だとか救急搬送とか、自分たちにできることをやれるような訓練内容にした。私これ2年ずっとかかわっていて、もしもこの訓練にこういった学校・保護者を巻き込んでいないとすれば、あれ、もしかしたら高齢者の方と関係機関だけの方の訓練になってるんじゃない

かと。学校を巻き込むことで保護者、いわゆる30代・40代の方々がいっぱい参加するんですね。これ非常に大事な部分じゃないか。高知県では多分熱心にいろいろやってらっしゃるので、若いお父さん、お母さん世代の方も来てるかもしれないんですが、岩手だとかこういったきっかけで若い方々も参加するということで、それも大きな意味があるかなと思っているところです。

続いて、釜石の大平中学校では、震災の後、いろんな復興教育・防災教育・ボランティアとかやっていたんですが、もう1回、中学生、自分たちにできること、こういったものを学んでいこう。災害発生時に進んで、中学生は進んでほかの人たちのために、地域の安全のために役立つ、できる、主体的に動けるような子どもたちに育てていきたいということで1年間、オリエンテーション、避難訓練、災害時のトイレの使い方、キャップハンディ体験、応急処置体験、炊き出し訓練とこういうものを学年ごとにいろいろ組み込んでいって、そして学校の総合防災訓練、学校独自に総合防災訓練というのを関係機関とかと一緒に生徒が避難所運営本部を設置して、避難所を開設しいろいろ対応するという、こういった学習なんかもやっています。非常に子どもたちが主体的に動ける。なので、自分たちが学んできたことをもって、いざというときには自分たちはどうすればいいのか。そういったものを擬似的に体験する、こういった訓練、学習も行われているところです。

そして、ちょうど先週3月11日、私は大槌高校に行っていました。3月11日、大槌高校では、土曜日だったんですが午前中、生徒さん、先生方集まって、お亡くなりになった方々の追悼とそして防災を学び、これからの復興を学んでいこうということで集会が開かれて、そのときに聞いた内容をちょっとお話ししたいと思います。最初に高校1年生の皆さんから、震災直後の大槌高校がどうだったのか、先輩たちが高校生の時に避難所とかでどう一生懸命地域の人たちのために頑張ったのかって話をされて、自分たちは今こんな活動をしているんだという紹介がありました。

私も大槌に赴任になりましたので、大槌高校には何度も行きました。大槌高校には教え子もたくさんいました。家族を失った子どもたちもたくさんいました。だけど、その涙をぐっとこらえて、私の顔を見ると「あっ、先生、大丈夫だった。よかった。私たち今頑張ってるから」という姿で対応された。そういったのを子どもたちは伝えて、そして、この学校には復興研究会という自主的に参加する研究会があるんです。

そこではいろんな班があって、例えば定点観測班、これは神戸大学の協力ですずっと震災直後から同じ場所の写真を撮り続ける、そして記録を残すっていうような活動も行われています。ある生徒は、そういう学習を通して大槌で必要なものをじっくりと考えることができたとか、私はこの同じ場所をずっと記録を撮り続けていく中で、やっぱり自分はこの地区、このふるさとが好きなんだということを改めて噛みしめたっていうような感想を持っていました。

小さな子どもたちの相手をする班があったり、あとは復興まちづくりのワークショップに参加した生徒なんかは、やっぱり思い出のある場所、ここへの思いというのが強くなった。そして、もっとこの大槌の復興に携わっていきたい。こういった感想を持った生徒さんもいました。

防災班とか地域の避難訓練に参加した高校生もいるんですが、その高校生の感想を見たらこんなことを書いていました。「小学生、中学生など若い人の参加率の低さが問題だと感じました。若い人が参加しないと5年前の経験が風化していく可能性があるんで、そこを改善できるような案を自分なりに考えていきたい」というような高校生もいて、さまざまな取り組みが行われています。

この復興研究会、参加している生徒の割合を聞いてみたんです。おそらく最初は2割とか3割だ

ったと思うんですが、担当の先生から、実は今年度、全校生徒の半分がこの復興研究会に入って、いろんな活動をしていると言っていました。そして、地域からはどんどん高校生に来てほしいということなので、行政もそうですけど、今学校としては、先生方もこの何とか班をたくさんつくって、そして高校生がどんどん地域の中に入っていけるような形をとっているというお話でした。

そして、この復興研究会の一環の1つとして、高知にも過去の津波の教訓を伝えていくために石碑がありますよね。岩手もたくさんあるんですね。大槌にも石碑があるんですが、ある高校生が震災後に石碑があったのを知ったと。自分は十分その石碑を活かしきれなかった。これは高校生のアイデアなんですけど、石碑じゃなくて木碑にしよう、木で作ろうと。そうすると、木は朽ちる、だから替えていかなきゃいけない。4年に一度、この碑を抜いて、また次の木を入れると。そうすると、後世に語り継がれていくんじゃないかという、高校生の発案です。そして4年に一度にしたそうです。4年前に当時の高校生が考えた。そして、それを現在の高校生が受け継いで、ちょうど左側の写真はその言葉を入れている。新たな木碑を作っている。そして先週の3月11日に、高校生とこれを発案した今大学生ですけど戻ってきて、そして地域のここの町内会の方々とともにこの木碑をもう一度建立してるっていう、これがその様子になります。

どんなに立派な石碑や像を建てても時代とともに震災の記憶は風化してしまう。だから、僕は4年ごとに建て替えられる木碑に住民の思いを刻み込み、建て替えるという文化をつくって、震災の記憶を残していければという高校生の発案ですね。やっぱりこういったものを大事にして、この地域を復興していく。

私、ここの町内会の会長さんのお話を聞く機会があったんです。ほんとに今ちょうどこの地域もようやく町ができつつある。こういう高校生の姿が、こういうアイデアがやっぱり次への震災の教訓を語り継いでいく大きなヒントになるんだということを町内会の会長さんもお話になっていました。

## 将来の希望である児童生徒を核としたまちづくり

最後に、改めて、今日のテーマにもちょっとかかわると思うんですけど、学校・家庭・地域、これが連携して一体となって防災や復興やまちづくりをやっていくということが大事なんだと思うん



ですが、実はこの図は、私、震災の前に釜石東中学校でいろんなことを取り組むときに作った図なんです。

震災の後、先ほど紹介した岩泉町の小本小学校、この震災で大きな被災を受けた地区の学校自体も被災をした当時の校長先生にこんなことを言われたんです。学校防災は、地域防災と一体じゃないと意味がないんだと。この地に生きる人たちから過去

の災害や教訓を学ぶんだと。学校が地域の方々との情報共有・連携、日ごろの顔の見えるつき合いが大事なんだと。地域と学校がつながっているということが、まさに命がつながっている。これを実感したんだというようなことを当時の校長先生はお話になっていました。

最後に、私は今、釜石東中学校の教え子に当時の受けた防災教育どうだったのか、今何を思っているのか、これからの生き方についてもインタビューして聞いて回ってるんですが、こんなことを言っていました。

ある生徒は、「私はずっと美容師になるのが夢だった。そしてこの震災で、あの大変な状況の中でボランティアで来た美容師さんに髪を切ってもらって、ああ非常にありがたいと思った。そして、その思いが余計強くなった。なぜかと言うと、自分はやっぱりふるさとに戻って美容室を開きたいんだと。その美容室に地域の人たちが集まれるサロンといいますか、地域の人たちが集まって、そこでいろんな交流ができるような場所をつくっていきたい」というふうに、この女の子は話していました。

2人目の子も、女の子なんですが、「どうして工学部建築に進んだの」と聞いたときに、「いや、先生、今復興に向けて建築が非常に大事だ。早く建築士の資格を取って、そしてふるさとのこの建築を通して復興に携わっていきたいんです。だから資格を取ったら、大学で学び終わったら、地域に戻って復興に携わっていきたいんです」と言っていました。

ある女の子は、「私は以前から看護師にずっとなりたかったんです。あのときにいろんな医療の方々に来て、私たちを助けてくれた。強くなったんです。そして、ふるさとを考えたときにどんどん高齢化も進んでいる。だから、私は今まで以上に看護師になりたいという気持ちと地域の医療に尽くしていきたいんだ」というようなことを話していました。

そして、ある生徒は「先生、僕は以前から農業に興味があったんです。できれば農林水産省とか



農業政策にかかわる仕事に就きたいと思ってるんです。しかし、その夢をかなえるとふるさとから離れざるを得ないんです。だけど、災害が起きた後に農業をできるだけ早く再開できるように、そういう仕事で自分は社会に貢献できるようにやっていきたいと思うんです」というふうに話していました。

今教え子たちと再会して、いろんな思いを持って今勉強しているという姿が見えてきました。ただ、中には自分の将来の夢をかなえようとする、ふるさとから離れなければいけない。自分の夢を捨ててふるさとに戻るか、でも、ふるさとも捨てたくない。だから、今自分がこれからどう生きるべきか、すごく悩んでいるんですという生徒もいます。今のこのふるさとを何とか復興に携わりたい。でも、自分がやりたいことはふるさとではできない、別のところになってしまう。だけど、ふるさとは捨てたくない。非常にジレンマを抱えている生徒もいました。

ただ、私自身がすごく大事にしていかなきゃと思うのは、このふるさとへの思いをやっぱり子どもたちが持つ、こういうことが非常に大事なんじゃないかと。たとえ離れることがあってもふるさとを大事に思う気持ちを、子どもたちに大事にしていく。それが教育にとって大きな意味を持つのかなと思っています。

そしてもう一方、釜石の自分のいた学区に宝来館という旅館があって、ここも大きな被害を受けて、女将さん自ら、岩崎さんってよくテレビに出る方なんですけど、津波にのまれて九死に一生で助かるわけですね。そして、その人は地域づくりをずっと夢持って頑張ってきましたので、何とか旅館を再開し、そして地域の若い人たちも雇い、今復興に向けてやっている。この間、その方の講演を岩手大学で聞いたときに、ぼそっと「実は今つらいんです。復興してきた、先が見えてきた。だからこそ、つらいんです。ほんとにこの後やっていけるのか。先が見えてきたから、この後、ほんとにお客が今減ってきてる。どんどん一時来てた人たちが今減ってるんですね。旅館としてやっていけるのか。実は今ものすごくつらい思いなんです。頑張ってきた。ようやく先が見えてきた。つらい。しかし、希望は子どもたちなんだ。学校の子どもたちが一生懸命頑張ってる姿を見れば、やっぱり次の若い世代にバトンを持っていくためにここでそう言っていられない、もうひと頑張りしなければ」という話もしていました。子どもたちがそうやって頑張ることが、今もつらいという方々の励みにもなっているんだということを改めて感じた次第です。

すみません。ちょっとまとまらない話になってしまいましたが、今現在、岩手で行われている復興教育の取り組みや少し現状についてもお話しさせていただきました。何か少し参考にさせていただければと思います。

以上で私の話は終わらせていただきます。長時間、ご清聴ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。岩手県のさまざまな事例を交えながらの復興の後の教育ということのお話だというふうに思います。

それでは、続きまして、講演の2つ目に入っていきたいと思います。和歌山県串本町の古座小学校の林宣行先生より、和歌山での防災教育についてお話をいただきたいと思います。よろしく願います。

### 3. 講演②

## 「地域を好きになる防災教育 ―子どもたちが地域をつなぐ―」

和歌山県串本町立古座小学校 教諭 林 宣行 氏

### 那智勝浦町の紹介と紀伊半島大水害の様子

皆さん、こんにちは、林宣行です。和歌山県の那智勝浦というところから来ました。那智勝浦行ったことあるよという方。ああ、いますか。ありがとうございます。私、高知県は5回目です。香川は1回、徳島も1回、愛媛は行ったことありませんけど、高知県5回来てます。高知が好きです。高知の食べ物、高知のお酒、何となく町の空気、私の住んでいる勝浦とよく似てるところがあります。海のもののおいしくて、高知愛があるんですけども、その高知愛に負けない那智勝浦町を愛する心というのがあります



地域を好きになる防災教育  
～子供たちが地域をつなぐ～

和歌山県 串本町  
古座小学校 林 宣行



和歌山県 那智勝浦町

4つの日本一  
山・海・川・滝

て、ちょっと最初に、私の住んでるところ私の自己紹介を兼ねてPRさせていただきたいと思います。

ここが私が住んでる那智勝浦町というところですよ。今回車で来ました。8時間半かかりました。遠いですが、でも、高知大好きです。私の住んでる勝浦には、子どもたちに誇れる4つの日本一のものがあります。

1つ目は、これ結構有名なんです。落差133メートルは日本一の那智の滝です。那智の滝の奥には、那智の原生林には60以上の滝があるといわれています。とってもきれいで、滝巡りなんかもお勧めです。その滝の1つでは滝行ができます。これ、今年1月1日です。寒いと思うでしょ、めっちゃ寒いんです。めっちゃめっちゃ頭痛いです。今年初めて中学校3年生の息子を連れていったんですけど、もう二度と行かないと言っていました。だけどね、この滝行やった後、何とも言えない神聖なというか、汚いものがすべて取れたようなそんな気分になるんです。ぜひ勝浦へ来て滝行なんか楽しまれてはいかがでしょうか。この那智の滝の奥に那智高原という高原がありまして、那智の滝133メートルにちなんだ133メートルのローラースライダーがあります。500円でマット借りて乗り放題です。

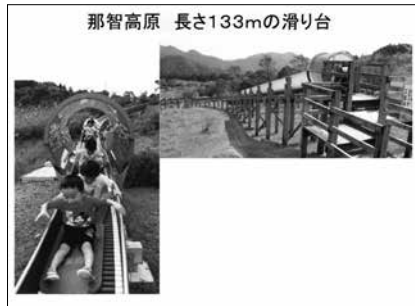
2つ目は海の日本一。これはもういろんな限定が付くんです

けど、延縄漁による生マグロの水揚げ量は日本一です。マグロを食べられる店が30軒ぐらいあって、マグロ、高知も魚おいしいですけど、勝浦も魚おいしいです。今月の5日に282センチ、446キロのマグロが揚がって、これヤフーニュースにも全国版のニュースになってました。この1匹から3,000人分の刺身が取れるそうですよ。私は食べれませんでしたけど、すごくおいしかったと思います。

3つ目は川の日本一。何じゃそれって感じなんですけど。ぶつぶつ川、13.5メートルは登録河川の中で一番短い川だそうです。あんまりこれはお勧めできないかもしれません。

4つ目は山の日本一。日本一の山と言えば富士山なんですけども、那智勝浦町はその富士山が見える距離322.6キロメートルで富士山が見える最遠の地だそうです。田んぼに水が張ってない、空気が澄んで、もう晴れ渡ってるときしか見えないそうなんです。私も見たことはありませんが、ぜひ一度チャレンジしてみてください。

それで、那智勝浦町の駅前で、これ林土産物店と書いてあるのが私の年老いた両親が細々とやっている土産物屋なんですけど、勝浦の駅、これ駅から撮った写真です、駅を降りたらすぐ土産物屋があります。もし皆さん、勝浦へお越しの際は、「林先生、知ってるよ」と言っていただければ必ず割引することになってますので、ぜひ勝浦へお越しください。お土産物を買っ



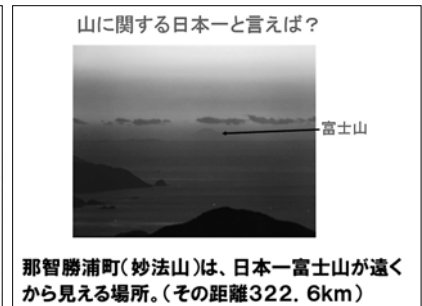
**紀州の味** **那智勝浦の生マグロ ～水揚げ高は日本一～**  
**あなたは本当のマグロを知らない**

料理店は30軒以上！

昔時、和歌山県の紀伊半島にマグロ漁船が集結する。このマグロは、遠くで獲るとしてワタシコチンにする高知マグロと違い、新鮮な近海の生マグロだ。

本当に美味い！マグロを食べようと思ったら、生マグロ本場！日本一の那智勝浦町をお勧めする。クロマグロ、メジマグロ、キハダマグロ、季節ごとに旬のマグロが揃っている。そしてあなたはまだ食べたことのない、本物の味に出会う。うまく表現するのが難いのだが、味と香りが立ち上るようだ、とっておこう。

那智勝浦町には30軒以上のマグロ料理店がある。朝にもホテルにも店一軒のハンズオンがあるので、お水に入りの店を探すことができます。刺身はもちろん、ワタシ焼き、ワタシステーキ、マグロ汁など、ただでさえ美味い！生マグロを様々な形で味わうことができます。



ていってください。

勝浦にはちょっと変わった祭りがありまして、9月の秋祭りです。大きい御輿があって、子どもの御輿があって、いろんな行列があるんですけど、町中を練り歩いた後、最後はこうやって大人の御輿が海に飛び込んで、それを権伝馬という船で引っ張りに行って、陸から渡船をこれ全部つなげて引っ張り合いっこをするという、結構面白い祭りがあるんです。この9月はお勧めです。そして、これも私です。今、これは息子と一緒に祭りやってる写真です。これ何だ、防災と全然関係ないじゃないかと思うかもしれませんが、これは私にとってはもう地域を好きになる子を育てるというのに非常に大事なことです。

特に学校の教師は、地域のことを好きじゃない教師はやっぱり郷土愛を子どもたちに伝えることはできない。残念ながら、私、小学校で勤務してるんですけど、自分の地元だけは上手に外されて、まだ自分の地元で1回も勤務したことないんですよ。それでも、自分の地元を愛してますけど、ほかの地域も郷土愛はやっぱり伝えることはできると思います。これが祭りやってるところなんですけどね。

ちなみにこのお祭り、私も中学校のときは中学生でこの船に乗ってたんです。私たちが子どもの頃はもう熾烈な争いで、中学校1年生は誰も乗れませんでした。2年生で乗れるのはちょっと権力が強い、言えばけんかの強いやつは2年生になったら乗れる。3年生になったら地域で大体乗れると。地域外の子なんかは絶対乗れなかったですね。今もう地域内だとかそんなこと言ってられません。今ぎりぎり1年生・2年生・3年生の3杯できるような状態です。そうすると教師の立場というよりは、地域のおじさんの立場として、学校に協力してほしいし、学校が何かあれば祭りの話いつでもしに行くし、伝えに行くし、すごいつながりを求めているというのが、自分が実際身をもって分かってるんです。

これが2011年の9月2日です。8月のお盆過ぎに船を下ろして1カ月ぐらい毎晩、雨の日以外は毎晩練習するんです。9月2日、この日に私のところへ先輩から電話かかってきました。でかい台風が来ると。船危ないから入江に、湾の中に船入れるから来いってということで集合がかかって、





私たちの後輩、先輩、同級生いろいろ来て、船を湾の中に入れたんです。これは9月3日の朝です。もうこれまでに雨が降って結構船沈んでるんですけど、その次が9月4日の朝です。もうここまで船が沈んでます。

この9月4日というのは紀伊半島大水害が起こった日です。私も朝起きて、すごい雨降ってたから、まさかそんな大きな災害が起こってるとは思わなかったけども、まず第一番に心配な船を見に行って写真撮ったんですね。その後、海も行きました。これが3日と4日、3日に撮った海の色と4日の海の色、全く違うのわかりますか。もう茶色くなってますね。ああこれはすごい雨降ったんだあって、このときはまだそれぐらいでした。この先の道を行くとJR線が折れて落ちてました。ああこれはすごいなと思いながらこの坂を越えて行ったんですけども、もうそこは水が出ていて車で行けないような状態で引き返してきました。

多くの方が亡くなりました。私の中学校のときの同級生も一家5人流されて、全員が亡くなっています。中学校のときの先輩の息子、中学生の野球少年でしたけど、その子も流されて亡くなっております。私、若いころサーフィンやってまして、四国にはサーフィンは来たことないですけども、九州一周サーフボード積んで回ったりとか、そのころは台風が来ると嬉しかったんですね、ああもうすぐ波立つだろうと思って。今もうちょっと台風来るってなったら、これ以降はちょっと怖いような嫌な気持ちです。

特にこの大水害があった9月4日というのは、悲しいかな、私の誕生日なんです。誕生日になったら必ず思い出す。5年前からそういう何かちょっと複雑な気持ちの誕生日になりました。これもやっぱり今防災教育を進めてる、絶対子どもたちを、命を守ってやるんだと。私の力で守れませんが、そういう子どもたちを育ててやるんだという原動力になってるような気がします。そのとき私の実家の土産物屋さんも、ほんのちょっとですけどこういう感じで被災しました。

### 片田先生の講演を参考に考えた防災授業

ここでちょっと授業を見ていただきたいと思います。片田先生のごことは皆さん、ご存じでしょう



か。ご存じない方もいらっしゃると思いますね。ありがとうございます。「釜石の奇跡」というのは多分聞いたことあると思うんですけども、その立て役者というか、群馬大学の片田先生、私の前任校の教頭先生が管理職研修か何かで、和歌山県で片田先生が講演していたのを聞きに行ったんですね。その話がすごくよかったと。学校へ帰ってきてその話をCDに何枚か焼いてくれて、これみんな聞けと。私ももらったんです。私も家へ帰って、その講演のCDを聞きました。すごくよかったです。これはやっぱり授業をつくって、子どもたちに授業しなきゃいけない内容だろうということだったのでこの授業なんです。

森本先生は釜石東中学校ですので、この授業はそのころマスコミにすごくきれいにリークされた部分でつくったので、実際のところとはちょっと違うところもあるようなんですけども、そのままやりますのでちょっと見てください。最初の部分は全く関係ないようなところから入ります。今から、教室にいる小学校6年生というような気持ちで私の授業を見てください。実際の授業です。

1枚の写真が出てきます。この写真を見て、分かったこと、気がついたこと、思ったこと、どんなことでもいいからノートに書きなさいと言って、子どもたちに書かせます。書かせた後、はい、じゃあ誰からでもいいから発表しなさいと。子どもたち、いろんなことを言います。「ちょっと写りが悪くて見にくい」とか、「何か煙のようなものが出てる」。「これは電車だ」とか「地下鉄だ」とか、「何か携帯電話持ってる人の手が写ってる」とか、細かいところまで結構子どもたち見ってきます。実は、これすごく大きな事件の前です。もう今の子どもたちは知りませんがね、先生方はもしかしたら記憶にあるかもしれません。韓国で起こった地下鉄火災の映像です。2003年2月28日、韓国の地下鉄で火災が発生しました。死者197名、負傷者147名、結構大きなことでニュースにもなったから覚えてる先生もいるかと思います。

もう1回写真に戻ります。じゃあ、「煙がもわーって入ってきたのにあの人たちは何で逃げなかったんでしょうか」と子どもたちに聞いていきます。子どもたち、これも小学生はいろんなことを言うんです。「大丈夫だと思ったんだろう」といろんな予想をさせます。実はこの中に生き残っていた人がいて、その人を追跡調査して、何で逃げなかったのかって聞いてみました。そうすると、「まさかこんな大変な火災が発生したとは思わなかった」という答えと、もう1つは、「みんながじっとしているので自分もじっとしていた」と。危険が迫っているのに、みんなが座ってたからおれも座ってたんだという答えがあったそうです。これもまた子どもたちに、じゃあ感想を聞きます。



ばかだと思ったとか何とかいろいろ書いてきます、子どもたちは。それも全部発表させました。

東京女子大学の名誉教授の災害心理学の専門家の広瀬先生は「人間は安心して生きていくために、心の中に遊びの部分がある。ある範囲までの異常は異常と感せず、正常範囲内と受けとめてしまう」。このことをちょっと難しいけど、「正常性バイアス」といいます。これは子どもにちょっと分かりやすく説明してやらないとだめです。例えば、夜お父さんと家族で寝てるときに庭先でガサガサって何か音がした。子どもはすごく気になります。「何かいるんじゃない、泥棒が来たんじゃない。何か音が鳴った」。子

もはすごい危険に対して敏感な心を持つて  
るところが、親は「風だろう。大丈夫だよ」。  
これはやっぱり生活経験が高くなればなるほ  
どそういうふうに関心の部分が大きくな  
ってきて、大丈夫だよって考えてしまう。こ  
れをここでまず押さえておくということが大  
事。“子どものほうが危険に対する認知力は  
高いんだ”というのを教えてます。



実際にこの先生が実験してるんです。テレ  
ビ局のビルディングの中で80人の人に対して煙を流した。そうしたらどうしたかっていったら、煙  
をゆっくり送り込んだときには70%の人がやっぱり大人は逃げなかったんだと。大人は何か危険な  
においがしても逃げないかもしれないよと思ってください。

### 「釜石の奇跡」といわれた避難行動につながる3つの教え

そして、この「釜石の奇跡」の授業です。じゃあ「さあ、何があったと思いますか」。これつく  
ったときは、東日本大震災の1年ぐらい後のときだったんで、みんなやっぱり「地震だ」って言い  
ました。岩手県の釜石で小・中学生の生存率のことですごく話題になった。その5年前にやったと  
きには、子どもたちはこれは知ってる子がいました。正確に何%までは知らないけどもかなりの人  
数が生き残ったというのを知ってる人もいたけども、全く知らない子もいました。これ予想させま  
す。予想させて、次の話。

実は釜石にはスーパー堤防というすごい堤防があった。ギネスにも載った世界一の堤防。これが  
堤防です。30年の年月と1,200億円の巨額な資金をかけてつくられた堤防、そんな堤防がつくられ  
てたんですよ。「さあ、どう思いますか。ここで変えてもいいですよ」。うーん、じゃあもうちょ  
と高かったのかなとか低かったのかなって、子どもの思考を揺らします。まだ答えは教えません。  
じゃあ地震発生のときの映像を見てください。

(映像を流す)

これまだ続きあるんですけど、子どもたちには全部見せるんですけど、津波が町を襲ってる様  
子がずっと映されてきます。実は湾口防波堤、世界一の防波堤だったんだけど壊れてしまいました  
。ここでもう1回答えを予想させて、なんと99.8%。釜石では1万人近くの人が亡くなったけど  
も、小・中学生は奇跡的に大勢の子の命が助かったんです。これで、この話は「釜石の奇跡」つ  
ていうことですごく有名になったお話なんです。

じゃあ「釜石の奇跡」の一部分だけだけでも、先生が本で読んだので授業をつくったから、ちょ  
っとその続きをやってみましょう。「じゃあ何で釜石では大人はたくさん亡くなったんだけど、小  
中学生は奇跡的に99.8%、ほとんどの子は亡くならなかったんだと思う」って聞くと、小学生は面  
白いですね。学校がみんな高台にあったとか、やっぱりそういう意見が出てくるんです。

じゃあ被災した後の学校の様子、唐丹小学校、どうですか。津波にやられてますね。釜石東中学

校、これも津波にやられてる。これ有名な鶴住居小学校の写真、みんな津波にやられてる、でも助かった。何か理由があるはずです。子どもたち、分かりません。この釜石の学校には、群馬大学の片田先生は、先生にも子どもたちにも地震・津波のときはこうするんですよって3つのことを教えてました。私の学校の生徒は今これ全部言えます。もう言わされてというか、ずっとそうやってやってきてるんですね、こうしなきゃいけないと。でも、そのときの子どもたちの、中には1つぐらい知ってる子もいましたけど、ほとんど知りませんでした。

じゃあ、今からのお話の中にこの3つのヒントが出てきます。鶴住居小学校と釜石東中学校の合同の避難訓練の様子です。こうやって避難訓練をやったんです。そして、赤いのが過去に来た津波、オレンジが津波の想定のところ。青は実際に津波が来たところ。想定よりも津波が来たというのがこれだから、そして、その部分のところで多くの方が亡くなってるんです。

ちょっと見てください。釜石東中学校というのはこのあたりにありました。地震が来たとき、多くの子はクラブ活動をしていました。「副校長先生が教頭先生が放送で避難を呼びかけようと思ったけど、放送できなかった。何でだと思う」「停電した」。そう、停電で放送できなかった。ハンドマイク使おうと思って、呼びかけようと思ったら、ほとんどの子がもう運動場に避難を始めてました。誰かの「逃げよう」という言葉を合図に一斉にみんなが走り始めます。この赤い線が釜石東中学校の子どもたちが走ったルート。

そして、そのお隣には鶴住居小学校という小学校がある。いつも一緒に避難訓練してる小学生。実はこのとき小学生たちは3階へ避難してました。だけでも、いつも避難を一緒にしている中学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが走っていく。「行くよ」って呼びかけられて、その小学生たちも中学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんに手引引っ張られたりおんぶしてもらったりしながら一緒に逃げ出しました。これがそのときの避難の写真です。

そして、小・中学生が一生懸命走って避難してる姿を見て、町のおじさんやおばさん、町の人たちも一緒に避難を始めた。これは逃げなきゃいけないって。進んでいくと保育所ですかね、幼稚園ですかね、の子どもたちと出会って、その子たちも抱っこしたりして一緒に避難していった。最初に避難したのはいつも避難訓練の場所だった避難予定所、ここへ避難したんだけど、ここも何かがかが崩れてきて、もっと逃げたほうがいいだろうということでもたまたま走り始めます。また避難します。第2避難所に避難しようとしたときに、後ろから大きな津波で町が襲われてるのが見えて、またさら

らに上に避難していったという話をします。最終的にこうやって高いところまで逃げたんだと。

これ実際に釜石東中学校から避難した道を走った動画があるんです。これを見せます。どれぐらいの距離を走っていったのかと。私も釜石へ3回行ってんですけど、1回ここ歩いたことがあります。結構な距離ですよ。これスピードは出してませんが自動車でも走ってますからね、ずっと走って行って、このあたりが多分鶴住居小学校です。もうこのころには瓦礫の山になってますが、ここで小学校の子どもたちも



合流して一緒に走ってます。そして、多分このあたりで保育所の子たちも一緒に走り出している。これも最後まで行きませんが、結構な距離を走ってるんですね。子どもたちの感想では、すごい距離を逃げたんだなあというのがありました。

さあ、じゃあ片田先生は一体子どもたちにどんなことを教えたんでしょうか。1つは、「想定を信用するな」ということを教えました。津波の想定12メートル、ここまでだよ。そんなこと信じちゃだめだと、そんなの当てにならないということと言ったんです。2つ目、「その状況の中でベストを尽くせ」。ここまで逃げたからもう大丈夫ではなくて、時間があるんだったら、体力があるんだったら、1メートルでも1センチでも高いところまで逃げろと。ベストを尽くせと。そして3つ目、「率先避難者たれ」。大人は逃げないかもわかんないから、君たちが逃げて、そして大人もついてくるように君たちが率先避難者になるんだということをお教えたんです、という授業をやったんです。

## 片田式防災授業 ―危機感は薄れる

これは新宮市というところにそのとき勤務してたんですけども、教育研究会の中の部会の代表の授業としてやって、先生方にこの授業をするのにあたっても参考にしながら、これ議論になったところもありました。これは果たしていいのかどうなのかってところもありましたけども、ちょっとそのままやらせていただきました。

そのときにはまさか片田先生とそういうつながりができるとは思わなかったんですけども、その次の年、この授業をやった次の年に、新宮市の私が勤務していた学校が和歌山県の防災の拠点校に選ばれました。そして、そのアドバイザーとして群馬大学の片田先生、金井先生に入っていて、防災についていろいろ教えてもらうようになったんです。そんな中で学んだ中で、この授業はだめだということです。こういう授業じゃ、子どもはだめだと。改善してというか、全然違う授業をちょっとまたやります。もう1つ、ちょっと授業を見てください。

これも1枚目は写真で始まるんです。この写真を見て、分かったこと、気がついたこと、思ったことをノートに書いて発表してくださいと。子どもたちはこれもいろいろ言います。日本ではないような、外国だ、家が崩れてるから多分地震の後の写真だろうとか言います。これはチリ地震のときの写真です。それも古いチリ地震です。

1960年5月23日の午前4時過ぎ、マグニチュード9.5は史上最大の地震です。チリで大きな地震があった。そして、その地震によって津波が発生しました。地震の後、15時間後にハワイを津波が襲います。そして約1日、24時間後、日本にもやってきました。これが日本での津波の高さです。一番高いところが4メートル5メートルの線ですから、結構大きな津波が来てるのが分かります。これは私ももちろんもうこんな知りません。そのときの日本の被害を受けた様子です。結構大きな被害ですよ。船もこうやって上がってます。死者・行方不明者142名、負傷者855名。建物壊れたのが4万6,000棟でした。日本は全く揺れてないのに、1万5,000キロ離れたチリで起こった地震によって日本は津波に襲われたんです。子どもたちは、ええーって感じですね。

実は2010年、こっちのほうは皆さんご存じなんじゃないですか。チリ地震が起きました。これは知ってますよね、6年前ですから。マグニチュード8.2は結構大きな地震です。そして、この地震によって日本にも大津波警報が出ていました。これは記憶に残ってますよね。このとき、私も覚え

てます。私は家族で嫁さんのお姉さんの実家、かなり山間部で絶対津波の心配のないところへ泊まりに行ってたんです。だから沿岸部にはいなかったんです。さあ太平洋沿岸の168万人に避難勧告・避難指示が出ました。当然子どもたちはこの時のことを知りませんね。じゃあ実際に避難した人、何人ぐらいいたと思いますか。これは何人か分かりませんが、ものすごく少なかったっていうの記憶にあるんじゃないですか。6万4,000人、たったの3.8%しか避難しなかったんですよ。

そして私の住んでる、じゃあみんなが住んでる和歌山はどうだったんだろう。和歌山県でも15市町村10万人に避難勧告・避難指示が出ました。実際に避難した人443人、これは0.4%です。ええーって言いました、子どもたち。これいいと思う人、誰も手挙げません。これちょっと問題だぞと思う人、みんなババッと手挙げました。これ100%の割合でいったら、0.4%だから足しか避難してない。これはちょっと問題だね。じゃあ何で多くの人々が逃げなかったんでしょうかって、これも子どもたちに書かせて発表します。

1960年にチリ地震が起こった、マグニチュード9.5。そして、50年後の2010年にチリ地震が起こった。50年経ってるのよ、50年。50年経ったらもうみんな忘れてる。だけど、今もし大津波警報が出たら、あのときよりは避難する人がたくさんいると思うよと。これはそうですよね。森本先生、これはそうですよね。この後大きな事件が起こって、今はまだ津波に対しての危機感が高まっています。そうです。2011年に東日本大震災があったからです。だから、この後だったら多分そんな0.4%の避難率ってことはなかったと思うんですけども、人間ってそんなもんなんだっていうのをやっぱり子どもたちに教えたいんですね。

## 片田式防災授業 ―自然災害は脅威

じゃあ、ここからもうちょっと現実の世界へ行きます。東日本大震災があったからね。これは新宮市が出してる、そのころの勤務校が出してる津波防災避難マップです。これでは新宮市は最大14メートルの津波が来ると。こんな数字言ったら子どもたちピンと来ないんですよ、小学生には。じゃあ三輪崎小学校の地面の高さは何メートルなの。誰も知りません。「では、今からある写真を出すから、その写真についてどこの写真か分かった人は座りなさい」と言って写真を出します。ほとんど座りません。何人か「ああ」って言って座りました。分かった人は座りなさい、ばらばらと座っています。

これ実は勤務校の体育館の横の壁に大きく張ってあるんですね。誰も見てません。ほとんどの子は見てません。ここに書いてあるんです。この付近の海拔は7.1メートル。運動場の高さが7.1メートルです。ここ7.1メートル。校舎の屋上まで12.75メートルあります。足したら19.85メートル。うちのクラス、ここ。「うちのクラスの床のところで16.1メートル、津波の被害想定が14メートルだから、よかった、助かった、ここまで来ないね、よかったね、もう安心だね」ってしつこく言ったら、子どもら「うん？」って言います。「えっ、だって14メートルまでしか来ないでしょ」って。そしたら「うん？」って。「想定を信じちゃだめだ」とか言います。「そうなの？」と。

東日本大震災があったときに、新聞とかテレビで散々言われた、有名になった言葉で2つある。1つは「未曾有」、かつてない経験。かつてないひどい未曾有という言葉と、もう1つの言葉がこの言葉でした。想定外、「想定外」という言葉。宮城県の女川町の笠貝島というところは津波が、ここまで、43メートルのどこまで津波が来た。43メートル、これも子どもたちイメージしにくいので

す。43メートル、もし三輪崎小学校に来たら、これぐらいまで津波が来る。校舎を今の2倍の6階建てにしてもだめです。3倍の9階建てにしたら、屋上にいたらぎりぎりセーフですと。

これは防災の授業で、公開授業でやったんです。このとき多分片田先生とかも見に来てくれたと思うんですけども。ちょうど校長先生が教室見に来てた。「どうする、校長先生に頼んで9階建てにしてもらう」って言ったら、子どもたち「うん、うん」と言っていました。でも6年生になったら、それは現実的でないのは分かります。「それは無理だね」って。でも、先生は多分想定は信じちゃいけないけども、そんなでかい津波は地形から考えて三輪崎小学校には来ないと思うという話をしました。

1990年～2000年にかけて地震が起きたところに赤いぼつんぼつんと出てくるからね、日本はこの真ん中にあるのが日本ね。じゃあ地震がどこで起きてるのか、ちょっと見てください。子どもたち、「うわあー」って言います。日本は地震が多い。日本は国土の面積が地球上の0.25%、めちゃめちゃ狭いです。なのに、マグニチュード6以上の大きな地震が起きる回数は22.9%。狭い日本で世界で起こる大きな地震のうちの5回に1回は日本で起こってるんだと。「ええー」って。

そして次、「これ、どこですか」と聞くと、これ子どもたちから答えが出ます。これはパリです。フランスの首都パリ。パリは、人類の歴史が始まって今まで一度も地震が起きたことはありませんと、これには子どもたちは衝撃ですね。「ええー、おれたちのところは5回に1回でかい地震が来るのに、パリは地震ないの」って。「そういうところは世界にはいっぱいあるんだよ」。もうこれで終わったら、子どもたちの心はずたずたですね。最悪の終わり方です。

## 片田式防災授業 ―自然の豊かな恵み

次です。日本はみんなが知っているとおり、周りを海に囲まれている。そして、日本の地層は沖積層層といって軟らかい地層でできてるから、揺れが来たら被害が大きい。でも、そのことだけ見たらすごくマイナスの悪いことのように感じるけど、周りが海で囲まれてるっていうことは、その海からたくさんの恵みを受けることができるでしょう。みんな、おいしい魚、昨日の魚もおいしかった。今日の海鮮丼もおいしかったです。そういうおいしいもの。おいしいものだけじゃない。海でできるスポーツ。海からのたくさんの恵みをみんな受け取ってる。

そして、地盤が軟らかいというのもあながち悪いことばかりじゃない。地盤が軟らかいおかげで、日本ではたくさんの作物が、豊富なおいしい作物がたくさんできる。地球上のほとんどの場所で、土地をほったらかしにするとそこは砂漠化していきます。今はもうこれ砂漠化も深刻な問題になってます。ところが日本は違う。日本は土地をほったらかしにすると、そこに草が生え、木が生え、ほっといたらそこは森林になる。だから、日本は北海道から沖縄までどこに行っても、きれいで風光明媚なところがたくさんあるでしょう。















じゃあ、みんなが住んでいるこの三輪崎小学校はどうですか。三輪崎小学校というのはここにあったんです。もう3階から、2階からでも見えたかな、目の前に太平洋、海が広がってる。海の幸があって、裏は山。紀伊山地の山が広がってる。みんなの住んでるところは、今までみんなが生まれ育ってきて、改めてそんなことを考えることないかもしれないけども、海の幸がもらえて、山の幸がもらえて、すごくいいところに住んでいるんだよっていう授業をしなきゃいけないんです。

前半の津波だとか授業とか、それはいろんな切り口があっていいと思うんですけども、絶対最後は、これ片田先生に一番教わったのは、防災の授業を恐怖の授業にしちゃいけないと。今まで私が防災の授業をつくってきたのは、地震は怖い、津波は怖い、だから逃げようという授業が基本だったんですけど、それをやったら、子どもは自分が住んでる地域を嫌いになってしまう。自分の国、日本という国を嫌いになってしまう。じゃあ、もうそんなのないところへ行こう。それじゃあ困ると。たった1回ぐらい、人生のうちで1回経験する地震や津波を上手に乗り越えていって、それでいて普段はその恵みを豊かにもらってる、ありがたい生活を送ってるということを教えてあげる。自分の地域を好きにさせるような防災教育をしないと、結局は町がすたれていく。だから、必ず授業では、自分が住んでる地域を好きになるような、嫌いにならないようなことを入れるようにしています。

## 防災・復興教育には自己アイデンティティを高める工夫が必要

あともう1つ。これはそういう地域の切り口でしたが、これは関東大震災の後の東京の写真です。これが今の東京です。阪神・淡路大震災の後の神戸です。今の阪神高速道路です。神戸の町並み、

<p style="text-align: center;"><b>防災教育による人間教育</b></p> <p>和歌山県教育の基本的方向</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 子どもの自立を育む学校教育の推進</li> <li>2. 地域の活力を育む人づくり</li> <li>3. 生きがいを持ち、自己実現をめざせる社会づくり</li> <li>4. 誰もが主体的に参画できる社会づくり</li> <li>5. 人権尊重社会の実現</li> </ol>	<p style="text-align: center;"><b>1. 子供の自立を育む学校教育の推進</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 確かな学力の向上</li> <li>② いじめ・不登校への対応</li> <li>③ 道徳教育の推進</li> <li>④ 健やかな体の育成</li> <li>⑤ 防災・安全教育の充実、安全・安心な教育環境の実現</li> <li>⑥ キャリア教育・職業教育と就職支援の充実</li> <li>⑦ ふるさと教育の推進</li> <li>⑧ 特別支援教育の充実</li> <li>⑨ 幼児期の教育の充実</li> <li>⑩ 国際化に対応した教育の推進</li> <li>⑪ 教員の実践的指導力の向上</li> <li>⑫ その他の施策</li> </ol>	<p style="text-align: center;"><b>これからの防災教育</b></p> <p>今の学校現場ではやらなければならないことが山積している。</p> <p>新たな事を始めるのは大変。</p> <p>これまでの取り組みの中に防災教育を絡めていく。</p>				
<p style="text-align: center;"><b>古座小学校の防災教育</b></p> 						
<ol style="list-style-type: none"> <li>① 消防署の方を招いての心肺蘇生法</li> <li>② 応急手当講習</li> <li>③ 警察の方を招いての交通安全教室</li> <li>④ 地域の方を招いての地震・津波学習</li> <li>⑤ 地域の祭りへの協力・参加</li> <li>⑥ 水泳記録会</li> <li>⑦ 着衣水泳体験</li> <li>⑧ 地域のクリーン作戦</li> <li>⑨ 持久走大会</li> <li>⑩ 地域の民舞</li> <li>⑪ 防災マップ作り</li> <li>⑫ 幼稚園への訪問交流</li> <li>⑬ 老人ホームへの慰問</li> </ol>	<p style="text-align: center;"><b>ボランティア免許取得制度</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;"> <p><b>ボランティア3級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p>  </td> <td style="text-align: center;"> <p><b>ボランティア2級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p>  </td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;"> <p><b>ボランティア1級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p>  </td> </tr> </table>	<p><b>ボランティア3級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 	<p><b>ボランティア2級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 	<p><b>ボランティア1級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 		<p style="text-align: center;"><b>日本人であることを誇りに思う防災教育</b></p>
<p><b>ボランティア3級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 	<p><b>ボランティア2級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 					
<p><b>ボランティア1級免許</b></p> <p>平成28年9月25日取得</p> 						



阪神・淡路大震災が上、下が現在の神戸です。これは新宮市です。新宮市は南海地震のときは津波よりも火事で、町のほとんどが火事でやられたんです。今の新宮市です。地震や津波だけじゃないですね。東京大空襲、大阪大空襲の後の東京、大阪、そして今の東京と大阪です。台風12号の後の私たちの住んでる紀伊半島です。今はもう着々と復興が進んでいます。

日本人というのは、地震・津波だけじゃなしに台風・洪水・戦争、爆撃を受けたり、今まで数々の災難に遭ってる。でも、それを乗り越えてそれ以前よりももっといい姿に、東日本大震災はまだまだしんどいかもしれませんが、きっといい姿になる。それは何でなのか。日本人のあきらめない心、強い精神力、そして協力し助け合うそういう心を私たち日本人は持ってる。だから、復興することができるんだよ。これは自己アイデンティティを高める教育といいますか、そういう部分でとても必要なのかなと思います。

地域を好きになったり、自分、日本人を好きになったりする。何か防災教育とはあんまり関係のないことのように思うんですけど、これはものすごい大事なことだと思うんですね。日本人すごく優秀です。でも、それより優秀だと言われてる民族、ユダヤの人たち。ユダヤ系の人たちは優秀なのはご存じですよ。会社の社長であったり、お医者さんであったり、高い学歴を持っています。ユダヤの人たちは過去に財産を取られたりいろんな迫害を受けて、お金持ちになったり、物を持ってたりしても、そんなの取られたら終わりだから、一番大事にするのは子どもに学力だとか知識を与えることを一番大事にするそうですね。

そんな中で、ユダヤの人たちが子どもたちにやるユダヤの帝王学といいますかね、教えるものの中の1つ、私の心に残ったのは、ユダヤの人たちは子どもを教育するときに、すごい自分のお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、先祖に対しての畏敬の念といいますか、あなたのおじいちゃんはどういうふうにすごい人だったの、素晴らしい人だったのよっていうのをずっと子どものころからやるんです。

日本人はあんまりやりませんね。あなたのお父さんはほんとにすごい人なんだよ。それ何かよその人が聞いたら、何かちょっと嫌味に聞こえたりしますよね。でも、それは日本人絶対やったほう



がいいです。だらしなくご主人がビール飲んでナイター見てる姿を見せていても、「お父さんみたいにならないでね」って言うっちゃだめなんですよ。そのとき、奥さんは「お父さんは今はこうやってだらしのないように見えるかもしれないけども、仕事に行ったら私たち家族のために死に物狂いで働いてる、すばらしいお父さんなの」って言わなきゃいけないですね。旦那さんは、奥さんが子どもをがみがみ怒ってるのを見て、後で子どもに「あんな女とは結婚するなよ」、絶対言うっちゃだめなんですよ。「分かるか、お母さんの深い愛情が。お母さんはおまえのことを心から思っでああやって言ってくれる。お母さんは素敵な人なんだぞ」って言わなきゃだめなんですよ。

これは何でか。これ防災教育というか、もう人間の教育の根幹にかかわる部分だと思うんですけども、自己アイデンティティを高めることです。自分のアイデンティティ。お父さんやお母さんの悪口、おじいちゃん、おばあちゃんの悪口言ったら、結局その血は自分に流れてるんですよ。地域を好きになるのもそうなんです。

このお話は私が実際に多分自分のアイデンティティの確立のうで非常に重要だったと思うんですけども、小学校のときに地図帳で千葉にも勝浦という地名があると。それを親父に言ったときに、親父が、勝浦の人間は、おれたち勝浦の人間、昔からあったかい人間で、自分たちの持つてる技術を隠そうとしない。誰にでも優しく教えてあげる。そういう気質を持った。だから、千葉の勝浦というのは勝浦の人たちにいろんな漁法を教えてもらって、それで勝浦という地名を付けたんだという話を聞いたんです。おおっとそのとき感動しました。

それはほんとに普段はそんなこと考えてませんけども、自分の心の中でそれは根を張って、今の自分の人間形成に大きな役割を果たしてると思うんですね。だから防災教育、地域とつながっていくうえでもやっぱりそういう地元を好きになって、自分を好きになるというような授業が大事なんじゃないかなと思っています。

## 学校教育・社会教育すべてが防災教育につながる

ちょっとまた戻って、これが和歌山県の教育の指針の中で、5つ目が「防災・安全教育の充実と安全・安心な教育環境の実現」。でも、これ見たら、学校の現場ってやらなきゃいけないことがもういっぱいあるんですよ。確かな学力の向上でしょ、学力上げなきゃだめだし、いじめや不登校を許しちゃだめだし、道徳教育も推進しなきゃいけない。健やかな体の育成、でもこれは、この入ってる全部、防災教育の一環として全部防災教育につながってると思うんですよ。

確かな学力、自分の頭で考えて判断する力がなかったら確かな学力なんかつかない。先生に言われたことだけやってるようじゃ、確かな学力とは言えない。それは地震か何かあったときに、自分で判断して逃げる力になるはずなんです。いじめや不登校、防災教育やってたら、さっき釜石の話ありましたけど、自分よりも弱い子どもたちやお年寄りを助けてあげなきゃいけないというボランティア精神だとか、そういうことを自然に学んでいくはずなんです。これ道徳教育もつながりま

## 日本人

地震 津波 台風 洪水 戦争…

あきらめない心  
強い精神力  
協力し助け合う心

## 復興

### 自分の住む地域を誇りに思う

災害を怖がるのではなく  
その時に備えておく  
そして、自分自身で判断し行動する力をつける

す。やっぱり逃げるためには体力もつくっていかなくちゃいけないということで、僕が片田先生から学んだのは、やっぱり防災教育というのは、逃げて命を、何よりも大事な命を守ることだけれども、それを進めることによっていろんなことが網羅できるんだということを教えていただきました。

これが今現任校の古座小学校の防災教育です。これは地域のお年寄りから踊りを習ってるんです。交通安全教室です。踊りの地域への発表会があって、心肺蘇生法、運動場に集まっているのはこれは休み時間の避難訓練の様子です。七夕集会で笹飾りして河内祭りという地域の祭りがあって、その船に付けるために、子どもたちは地域の祭りのためにこうやって学校でやってるんです。地域の発表会があったり運動会があったりとか、これを何か今までは防災教育と全く関係のなかったようなことを全部羅列して、これをこっだけ頑張ったらこういうふうにポイント制だとか何とかやって、全部防災に絡めていこうと思ってるんですけど、今まだなかなかできてない状態なんです、やらなくちゃいけないことが多すぎて。

そして、これも釜石東中学校で「ボランティアスト」という、地域のボランティアに行ったら自己申告制でポイントがもらえるよとか、地域の何か行事に参加したらポイントがもらえるよと、そういうような形でボランティア免許を作って子どもたちに推進していこうと思っています。

あとは地域につながっていくというのは、なかなか学校からは今まで難しいハードルだったんですけど、まず、私の学校でやった地域とのつながりの第一歩は、ほかの先生方、地域というところちょっとハードルが高いんですよ、それでまずは保護者とつながる。保護者とのつながりは簡単です。先ほどの森本先生の発表にもありましたけども、授業参観で保護者呼んで防災の授業を見せる。または保護者も一緒に避難訓練をする。そして、これは夏休みに防災マップづくりの宿題を出すんです。これは家族を巻き込むという。

新宮市では「新宮市高いところマップ」、全戸配付です。全家庭にこれ配付されていて、自分が住んでる地域が海拔何メートルかっていうのが分かるんですね。ここはどれだけ高くなってるか。これももう全戸配付になってるんですが、大体もうなくしたとか、どこいったか分からないという家庭もあるので、市の防災に掛け合って児童数全部もらってきました。そして、夏休みに入る前にそれを子どもたちに渡して、夏休み中にこれを親と一緒にやってきなさいという宿題なんです。

まず自分の家に印を付ける。林の家は海拔大体何・何メートルのところにありますよという印を付ける。そしたら海拔を書いて、第1避難場所を決める。八幡神社32メートルって第1避難場所を決める。そこまでの逃げる道筋に線を書く。そして第2避難場所を決める。第2避難場所までの逃げる線を引くと。そして実際に親と一緒に家族で時計持って避難してみても、親御さんには十分交通に気をつけて配慮してやってくださいということで、何分かかったのか。第1避難場所までは何分で行けた。第2避難場所まで何分で行けた。そして、途中で家族で気がついたこと。ここはもしかしたら橋が落ちてるかもしれない。ここは古い家が多いから家が道を塞いでる可能性があるということを書いてきて、学校に持ってくる。

まず手っ取り早く地域よりも保護者とかかわり合うのはこういうような形でやって、これを持ち寄って、さらに同じ地域に住んでる子どもたちのグループで意見をまとめて、じゃあここはこうしたほうがいいかなというのでみんなで発表会をするというような実践を行いました。

以上で私のお話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 4. パネルディスカッション

### 「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」

- ◎コーディネーター 畦地和也氏（高知県自治研究アセンター理事）  
◎パネリスト 森本晋也氏（岩手大学大学院教育学研究科〔教職大学院〕  
岩手大学地域防災研究センター 准教授）  
林宣行氏（和歌山県串本町古座小学校 教諭）  
松本敏郎氏（黒潮町情報防災課 課長）

（畦地）

皆さん、こんにちは。自治研究センター理事をしています畦地と申します。本職は黒潮町役場の職員でございまして、今ちょうど教育委員会にいるもので防災教育をやっておりますけれども、僕も含めて、今日前に並んでる4名全員が片田先生にご指導をいただいている、薫陶を得ている者ばかりでありまして、非常に片田イズムといいたいでしょうか、片田先生の防災教育に対する、ある意味どういいたいでしょうか、ほんとにただ単に逃げるとか、そういう枠を超えた大きな可能性をいつも片田先生のお話から聞かさせていただいております。そんなことも含めて、今日は片田先生のもとに集まる全国の防災教育を進める人たちの中でも代表的なお二人の方ですね、森本先生、林先生に高知に来ていただきました。

そして、今日は私の同僚でもありますけれども、当町の情報防災課長のほうから、今、当町では地区防災計画づくりというのを進めておりますけれども、そこ子どもたちの関係、あるいは学校教育との関係、そこら辺の大きな可能性というものが我々見えてきましたので、そこも含めて、うちの松本のほうからもお話をさせていただきたいと考えております。

非常に時間が短いですので、ご質問もいただきましたので、そのご質問をまた皆さんにお願いをしながら進めたいと思います。



まず、松本敏郎黒潮町情報防災課長から、今ご紹介しました黒潮町の取り組みを20分ほどご紹介いただいてから議論に入りたいと思います。それでは、松本さん、お願いいたします。

（松本）

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました黒潮町の情報防災課の課長をしております松本と申します。今日これから話されるパネルディスカッションのネタ提供ということになろうかと思いますが、テーマが「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」

ということですが、分かりやすいようで分かりにくいようなテーマだねということで先ほど打ち合わせをしておりました。

そこで黒潮町の実際の取り組みを少しお話しさせていただきたいと思います。前にも書いているように、防災にも強いまちづくりということで、実は黒潮町5年前に東日本大震災の後、1年後、国の新想定で最大津波高34.4メートルというびっくりするような数字を国から示されました。非常に町もびっくりしてきたんですけど、その後、町がとったのは少し特徴的に言うと、対策から入りませんでした。

思想から入った防災ということていくわけですけど、これはどうしてかと言うと対策からは入らなかった。逆に言うと入れなかったということですね。

そのとき新想定で言われたのは、黒潮町最大津波高34.4メートル来るかもしれないですよ、そして最大震度は7かもしれないですよ、しかも高知県には2分で来るかもしれないですよという3つのことを言われただけです、それにびっくりしたわけですね。それで今後、町としてはこれからさまざまな具体的な情報が国あるいは県から入ってくるだろうと。そのときに住民の方が不安にならないようにするためには、やはりしっかりした考え方を持っていかなければならないというところの切り口から、「対策ではなく思想から入ろう」というのが、私たちが取り組んできたことでした。

具体的にはやはり被災地から学ぶべきですけど、その前に私たちの町はどういうふうな町かいうことをしっかり考えました。私たちの黒潮町は先ほどの勝浦と同じです、カツオがおいしくて、そしてクジラが自慢で、そして長さ4キロの砂浜をもう30年も前から、私たちの町は美術館はないけれどこの美しい砂浜が美術館ですというふうな、この思想でまちづくりをしてきた町なんです。要するに、海を自慢してきた町です。そのことは、新想定があろうがなかろうが私たちは変えませんということをもまず腹に決めたわけです。

というのは、確率からいっても、現実的からいっても、黒潮町は100年のうち99.999%は海の恵みが満ちた町であることは変わりなくて、そしてこれからも変わらないということ、まず根本的に腹をくくったわけです。まちづくりの思想をしっかり持ったということです。

ただ、示された現実には厳しいですので、それでは何からやるかということなんですけれど、まずやはり東日本の被災地をしっかりと見てこなければならぬと。その思想を持つにもそれが根本ですので、私はちょうど新想定があった年の4月から情報防災課長です。今5年目なんですけれど、そういうこともあって1週間時間をいただいて、当時の南海地震対策係長が国交省から来てましたので、一緒に東日本の現場を見に行かさせていただきました。

ちょうど被災から1年後でしたけれどまだ復興が始まってなかったですので、これちょうど東松島市の野蒜の駅なんです。この駅から南側に歩いていくと松原が広がって海があって、これから北側に向かうと野蒜小学校という、そこでたくさんの方が避難所と指定された体育館の中で犠牲になられた地域なんですけれど、この駅のところに車を止めてずっと海のほうに歩いていくと、松原



があって破壊された町がありました。しばらく行くと砂浜の後に海が見えるわけですけど、その歩いてるときに、私の頭の中でふるさと黒潮町の入野地区の景色とこの景色がダブってしまって、頭が真っ白になったのと背中にじわっとするような汗を感じて、これはこれから情報防災課長として心してかからなければならないなというふうにはほんとに思った瞬間でございました。

それで5年間心してやったつもりですけど、結局思想といっても難しいことを考えたわけじゃなかったですね。行き着いたのは「あきらめない」ということでした。34.4 mというふうに言われて一番怖かったのは、次に来る地震であるということと言ったわけじゃなかったんですけど、住民の方がそこであきらめが生まれた現実がありましたので、南海トラフ地震は必ず来ますので、そのときに過去の津波のように5メートル、7メートルでもうちの町一部破壊されます。そうするとたくさんの方が亡くなってしまいます。そのことが怖ろしかったわけです。

だから、あきらめない心を持つために、町は何をしなければいけないか。そして地域は何をしなければいけないか。住民は何をしなければいけないか。それを具体的な施策に落とし込む。これをしなければいけないということで始まりました。

そして、町は大事なことは、住民に対して理屈ではだめです。具体的な施策をもって早急に示さなければいけません。まず町がやったのは、200人ぐらいの町の職員がおるんですけど、すべての職員に防災担当を兼務させました。防災に特化した地域担当制という制度なんですけれど、町内14の消防団区があるわけですけど、その14の消防団区に全部の200人の職員を振り分けて、それぞれの業務と合わせて兼務させる制度として確立しました。

そして、その後2カ月ぐらいで町内の避難空間すべてを見直しして、そして167回のワークショップぐらいをやったんですけど、すべての避難場所を見直しして、9月の補正で既に10億ぐらいの補正をかけました。つまり避難空間、安全に逃げれる場所の確保をしていくという施策です。そして実際に避難場所の整備、避難タワーの整備とか、住民の方が目に見て「あっ、何とかなるんじゃないか」という状況を示す作業を急いだわけです。すぐにはなかなか目に見えなかったんですけど、約1年ぐらいかかります、調査して設計が入りますので。ただ、そういうことを繰り返し繰り返しやって1年ぐらいして形が見えだすと、住民の方の気持ちも変わっていきます。

職員体制で目に見せる。そして、その住民の方と一緒にワークショップして避難場所を目に見せる。そういう作業とかをやってくるわけですけど、とにかく住民とコミュニケーションをたくさん

とりました。200人の職員でないとできないことです。そのときの情報防災課、現在私を入れて10名、3つの係で10名なんですけれど、当時南海地震対策係というのは2名でしたので、それではできない作業なんです。しかも短い時間でやらなければならない。

そしてずっとそういう制度のもとにやってきたワークショップの数ですけど、今年の9月ぐらまでのデータだと思いうんですけど、やってきた



ワークショップの数は1,056回、参加者は5万を超えています、実際は。さらにこれ1,100回をもう既に超えてると思います。もう1,300回ぐらいいってるかもしれません。やったのはこういうコミュニケーションをして、そしてその経過を目に見せるということで、住民の気持ちが変わってきました。

ただ、その変わってきた事例として、住民の方がどういう状況なのかというと、町の中で「おれは逃げない」ということが恥ずかしくなった雰囲気なんですね。そういうこと自体が恥ずかしい。もちろんそれ学校で子どもたちにも一生懸命防災教育をしてますので、その影響も大きいんですけど、それ言うのが恥ずかしゅうなったわけです。最初は勇ましく言ってたんですよ。「おれは逃げない。もう34メートル来たら、おれはいいから逃げない」というふうなことを言ってたんですけど、それが少し恥ずかしくなった雰囲気がまず町にできました。

そして一定のレベルまで来たと思うんですけど、ただ、これでほんとに今、町は「犠牲者を出さない。ゼロ」というふうな目標でやってるんですけど、それが達成できるかというところできないですね。じゃあどうすればいいかということなんですけれど、行政主導のワークショップの数というのは200人の職員であれ精いっぱいです。あれ以上というところちょっと過酷でちょっと難しいです。それに住民の方5年間で5万人参加したといっても1年に1回ぐらいしか参加してない状況ですので、それをどうすればいいかと考えると、それはもう地域の文化に昇華をさせていく作業をしなければいけないですね。文化にする施策を組んでいかなければならない。

じゃあどういうふうな取り組みをするべきかということで今考えてるのは、キーワードは「総力戦」だと思ってます。被災してしまうと、これはもう総力戦に持ち込まざるを得なくなるというか、家族の命と自分の命も含めて、地域も含めて守るために総力戦に持っていかざるを得ないんですけど、被災する前の総力戦ですね。どういうふうな具体的な施策に落とし込みができるかということを考えていくわけです。

地域文化の創造のイメージなんですけれど、「推進エンジンの確保」、これは一定先ほどの制度で確保しました、具体的にですね。そして、まず肝心なのはやっぱり教育です。義務教育、特に小学校6年・中学校3年、9年間の義務教育、悉皆制が担保されているところです、魅力はですね、そこでしっかりやっていくことがまず大事。そしてもう1つは「地区防災計画制度」、そして3つ目が「生業からの参画」、そして4つ目が「受援力の強化」というふうに考えております。

 <p>防災にも強いまちづくり 2012年3月31日の内閣府中央防災会議公賞 最激震度7、最大津波高さ4.4m、高知県には記録3分で津波が到達する。 避難放棄者を出さない！ あきらめない。</p>	 <p>黒潮町は、自然の二面性を理解し、災害で命とさない自然とふれあうことをすすめる心を育むこと。 黒潮町は、百年の内99.99%は、海に恵まれ、津波にさらされた町です。そして、これまでも、ここから、地が自然の町に変わりはありません。</p> <p>私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。</p>	<p>2012. 3. 31に公表された情報では、黒潮町の防災対策を検討することは不可能</p> <p>それでは、何からやるか。</p> <p><b>思想を創れ！</b> 多少なことではブレない、黒潮町の「防災思想」を持つことがまず大切</p> <p>そのためには、東日本の被災地から、深く学ばなければならない。</p>																												
 <p>これは・・・ 心して、かからなければならない。</p>	<p><b>あきらめないために・・・</b></p> <p>町は何をしなければいけないか、 地域は何をしなければいけないか、 住民は何をしなければいけないか、 それを、具体的(施策)に落とし込んでいく。</p> <p>防災思想 ↓ 具体化</p>	<p>町は、防災施策を形で住民に見せることが大切</p> <p><b>地域担当制の組織図</b></p>  <table border="1"> <tr><td>華刀分団</td><td>8地区</td></tr> <tr><td>伊予分団</td><td>6地区</td></tr> <tr><td>砂分団</td><td>1地区</td></tr> <tr><td>佐賀分団</td><td>12地区</td></tr> <tr><td>伊田分団</td><td>3地区</td></tr> <tr><td>春井分団</td><td>1地区</td></tr> <tr><td>上田口分団</td><td>4地区</td></tr> <tr><td>豊田分団</td><td>1地区</td></tr> <tr><td>藤分団</td><td>4地区</td></tr> <tr><td>早坂分団</td><td>7地区</td></tr> <tr><td>大野分団</td><td>6地区</td></tr> <tr><td>田の口分団</td><td>6地区</td></tr> <tr><td>田野分団</td><td>1地区</td></tr> <tr><td>出口分団</td><td>1地区</td></tr> </table>	華刀分団	8地区	伊予分団	6地区	砂分団	1地区	佐賀分団	12地区	伊田分団	3地区	春井分団	1地区	上田口分団	4地区	豊田分団	1地区	藤分団	4地区	早坂分団	7地区	大野分団	6地区	田の口分団	6地区	田野分団	1地区	出口分団	1地区
華刀分団	8地区																													
伊予分団	6地区																													
砂分団	1地区																													
佐賀分団	12地区																													
伊田分団	3地区																													
春井分団	1地区																													
上田口分団	4地区																													
豊田分団	1地区																													
藤分団	4地区																													
早坂分団	7地区																													
大野分団	6地区																													
田の口分団	6地区																													
田野分団	1地区																													
出口分団	1地区																													

防災教育はどういうところに期待するかというと、悉皆制とそれから長期の教育の中で10年間やれば中学生立派な町民、町に残ってくれば立派な防災の知識を持った大人に、町民になってくれます。さらに10年やれば今度子育ての世代に入っていくと、よい循環が回る可能性があります。そういうところに教育は力があると考えております。それからもう1つは、先ほどから出てきているように、危ない危ないだけじゃなくて、自然が持つ二面性をしっかり教えることで、災害に強い心とそれからふるさとを好きになる心を合わせて教育をしていくこともできると。

これは実は高校生サミットという昨年11月にやったんですけれど、これ世界中から集まった高校生が山の上、避難場所の上の端で海向いて「おーい」いうて吼えてるんです。どうしてこういうことをさせているかということ、黒潮町の小学校の教育をそのままやったんです。危ない危ないと言ってやってきた教育に対して、町内の校長先生、今されてる方の教育の中で、それでいいだろうかという思いの中で、やはり子どもには海の恵みで育った家族のこと、そして地域のことをしっかり教えなければならないという思いの中で、そうですね、もう5年か6年前からこういうことをしてました。それを世界の高校生にやっていただいたわけですけど、非常に共感を持っていただきました。

それからもう1つ、教育にはすごい力があると思うのは、昨年の11月5日「世界津波の日」の日に合わせて夜間避難訓練を初めてやってみました。全町的な夜間避難訓練です。参加者は4,038人の方が参加していただいて、町民の中の34.5%が参加しました。夜間ですからかなりよかったんじゃないかと思えますけれど、この中である地区47%参加した地域がありました。そこは非常に学校とコミュニケーションをとっている地域です。ゲストティーチャーに区長さん、自主防の会長さんが行ったりしておるとこなんですけど、その方が私に向かって喜んで言ったことがあります。地域には、こいつは絶対防災訓練には来ないというレッテルを張られた方が必ずおります。皆さんの地域にもおると思うんですけど、レッテル中の大レッテルを張られてる方がちょうど小学校に5年生の2年生の子どもさんがおいでるところなんです。その人がこのときはふうふう言いながら上がってきたと、避難所へ。

そのことにびっくりして喜んでおったわけですけど、結局子どもさんに引っ張られて、言われて、地域の人に来て、おんちゃんと言束してるので行ってくと、行かないかんというような形で引っ張られてきたわけです。これ子どもの力以外では不可能ですね。そういう力、一例ですけど、子

<p>参加人数と活動内容別の実施回数(累計)</p> <p>累計: 回数 / 参加者数 1,056回 / 48,222人</p>	<p>■防災の日常化へ向けたシフトチェンジ</p> <p>住民一人一人が防災に対する意識を高め、自らの命と生活を守るよう、行政がリードしてきた構造を段階的にシフトしていく → 防災を地域文化へと育む</p>	<p>それでは・・・シフトチェンジを、どのように達成するか</p> <p>↓</p> <p>「防災」を地域文化とする 具体的な取り組みが必要</p>
<p>防災文化の創造</p> <p><b>キーワードは、総力戦!</b></p>	<p>防災文化の創造</p> <p>推進エンジンの確保</p> <p>↓</p> <p>黒潮町防災教育プログラム + 地区防災計画制度の活用 + 生業からの参画を促す + 受援力の強化</p>	<p>基本となるのは・・・災害に強い町民をつくる「防災教育プログラム」</p> <p>文化</p>



どもにはあるし、教育に地域を逆に引っ張る力がある事例だと思います。ただ、こういうことを学校だけに任せて済むようなことではないですよ。そんな虫のいい話はないですので、やはり地域では地区のわがこととして感じられる地区防災計画制度もあるわけですからやっていかなければならないんじゃないかというのが、私たちが地域に話してることです。

そのためにはまず発想の転換も必要だと思っています。阪神・淡路大震災、東日本大震災、誰が命を助けたということをしっかり考えなければならぬということです。助けたのは近くの人ですよ、ほとんど。阪神・淡路の例を出すと、レスキューで助けたのは1.7%です。近くの人、通行人も含めて近くの人が助けたのは97%ぐらいです。その現実をしっかり考えると、地域の命は地域の人助けられる。だから、今までの「誰々がやらなければならない防災」、「町がやらなければならない、学校がやらなければならない」から、「地域でなければ、自分でなければできない防災」。現実をしっかり見なければいけませんよということを地域の方と話しております。

そして今、平成26年から実はこの地区防災計画の取り組み始めたわけですけど、特徴はモデル地区を決めてやる方法じゃないです。全町的な方法を目指しておりますので、61のうち40ですね、今42になってると思うんですけど、地区は地区の意思として計画をつくるというふうなことを決めております。まだつからないという地区があったり、回答なしとかいう地域もあるわけですけど、続けて、町のほうは全町的な推進を図るつもりです。

ただ、この地区防災計画、結構厄介な作業だとも思ってます。難しいソフトの中のソフトだと思っております、結構ややこしいので、それを成功する仕掛けをしっかり考えなければならぬと思っております、その1つが地区防災計画シンポジウムというのをやっております。今年度11月にやったので2回目ですけど、先ほどからお話に出てくる片田先生あるいは矢守先生なんかの協力もあるし、被災地大槌町から佐々木さんという安渡地区の、被災地で地区防災計画をしてるところなんですけど、その方に来てもらったりいうことをしますけれど、メインは地区防災計画をつくってる人に選抜して4地区ぐらいに報告してもらいます。そして、それに合わせて学校からも報告してもらいます。学校と地域のやりゆうことがお互い共有できてないという現実が実際あるわけです。この機会を使って、学校でやってることを地区の人にも聞いてもらう。地区でやってることも学校の先生方にも知ってもらうというふうな仕掛けなんです。昨年300席の席上、満員で立ち見が出ました。

<p><b>こどもの方が分かる事例</b></p>	<p>ただ、学校だけにお任せすれば済むような、虫のいい話ではない。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p><b>地区防災計画制度の活用</b> (我がこととして感じられる手づくりの防災計画)</p>	<p>地区防災計画を進めるためには・・・ 「防災・減災」に向き合う発想の転換が必要</p> <p style="text-align: center;">「・・・が、やらなければならない防災」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">「・・・で、なればできない防災」</p>
<p>町内(61地区)地区防災計画への取り組み状況(2016.7.21現在)</p> <p>※特徴は、モデル地区方式全ではなく、防災文化の創造を意識した全町方式であること。</p>	<p>第2回地区防災計画シンポジウム&amp;夜間津波避難訓練</p>	<p>町地区自主防災会の報告事例</p>

そして、ここで仕掛けの中で1つポイントは、大事にしてるのは学校との連携もありますけれど、地域の持っているいい意味でのローカルナショナリズムを刺激するという作業です。地域というのはそれぞれ地域の思いがあって、分かりやすいのは運動会なんかで地区対抗運動会が一番盛り上がるということですね。あの思想をこういうところに持ってきて刺激しながらやると、非常に地域頑張ってくれます。実際に今年報告してくれた町地区の報告はいろんな方向から評価されて、先日は京都大学で地区防災計画学会というのがあって、そこでも報告をその地区代表の方がしました。それから、先日はJICA というところが来て、そこでもその代表者が報告しましたが大絶賛です。

やったことは、どういうことを話したかという、これなんです。避難タワーがあるとこなんですけど、避難タワーに1軒1軒の家庭の大事なものをあらかじめ保存しておくという作業です。中にはどういうものが入っているかというところなんですけれど、大事なお薬とかそういうものが入っておったりします。これ誰でも思いつくことなんですけれど、思いついてもやらないんですね、地域で、地域ぐるみで。案外いろんなこと、難しい発想とか奇抜な発想は要らないです。当たり前のことをみんなで当たり前にするような作業、これができてない、案外できてないです。そのことを先ほどの地区防災計画シンポジウムの中で発表してもらう。その発表で、また地域が刺激を受けるというふうな作業。これが1つの仕掛けです。

それからもう1つ、分かりにくかったと思うんですけど、「生業からの参画」とはいかなるものかということです。今、総力戦に持っていく作戦の1つですから、これは分かりやすいのは耐震です。耐震、非常に熊本地震があって特に注目されますけれど、どういうふうに進めていいかということです。当然制度も変えていくのも当たり前ですけど、私たちが使ったのは大工さんを刺激するということです。大工さんをどういうふうに刺激したかという、黒潮町の耐震非常に悪いので、まだ4,400軒ぐらいの課題があります。1軒当たり、平成27年までの実績でいうと130万ぐらいで耐震できます。大工さん、仕事ない仕事ないとおっしゃるけれど、130万に4,474掛けたら58億

<p>収納ボックスの中身</p> 	<p>生業からの参画とは・・・</p>	<p>○黒潮町の住宅耐震化進捗状況 (平成28年4月 概数)</p> <table border="1"> <tr> <td>黒潮町の住宅総戸数(黒潮町家屋台帳)</td> <td>7,441</td> <td>戸</td> </tr> <tr> <td>新耐震基準戸数(昭和56年4月以降着手・新築取得済)</td> <td>2,967</td> <td>戸</td> </tr> <tr> <td colspan="3"><small>※住宅総戸数調査日数：(自19年度～平成27年度)180戸 (平成27年度33戸)</small></td> </tr> <tr> <td>旧耐震基準戸数(昭和56年3月以前着手・新築取得済済)</td> <td>4,474</td> <td>戸</td> </tr> <tr> <td>耐震化率(黒潮町)</td> <td>39.9</td> <td>%</td> </tr> <tr> <td>平成25年度 耐震化率(高知県)</td> <td>75</td> <td>%</td> </tr> <tr> <td>平成27年度 耐震化目標(国)</td> <td>90</td> <td>%</td> </tr> <tr> <td>平成32年度 耐震化目標(国)</td> <td>95</td> <td>%</td> </tr> </table> <p>(平成27年度の平均受震率) (58億円(仮定)×1)</p> <p>1,300千円×4,474戸=5,816,200千円</p>	黒潮町の住宅総戸数(黒潮町家屋台帳)	7,441	戸	新耐震基準戸数(昭和56年4月以降着手・新築取得済)	2,967	戸	<small>※住宅総戸数調査日数：(自19年度～平成27年度)180戸 (平成27年度33戸)</small>			旧耐震基準戸数(昭和56年3月以前着手・新築取得済済)	4,474	戸	耐震化率(黒潮町)	39.9	%	平成25年度 耐震化率(高知県)	75	%	平成27年度 耐震化目標(国)	90	%	平成32年度 耐震化目標(国)	95	%				
黒潮町の住宅総戸数(黒潮町家屋台帳)	7,441	戸																												
新耐震基準戸数(昭和56年4月以降着手・新築取得済)	2,967	戸																												
<small>※住宅総戸数調査日数：(自19年度～平成27年度)180戸 (平成27年度33戸)</small>																														
旧耐震基準戸数(昭和56年3月以前着手・新築取得済済)	4,474	戸																												
耐震化率(黒潮町)	39.9	%																												
平成25年度 耐震化率(高知県)	75	%																												
平成27年度 耐震化目標(国)	90	%																												
平成32年度 耐震化目標(国)	95	%																												
<p>大工さんを本気にする・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>町内登録工務店の耐震教室</li> <li>耐震診断修了者対象の個別相談会</li> <li>耐震事業個別訪問</li> <li>耐震改修技術学校</li> </ul> <p>(町内認定業者数の概数)      ・事務所：11(20年度)→13(28年度)      ・事務所：12(26年度)→15(28年度)      ・工務店：10(26年度)→13(28年度)</p> 	<p>AMDA南海トラフ地震対応プログラム  <b>受援力の強化          高知県黒潮町モデル</b></p> 	<p>地域防災力強化のイメージ</p> <p>黒潮町地域防災計画</p>  <p>地域の実情にあつた      実践的な防災訓練の実施</p> <p>災害時に、訓練以上のことはできません。</p>																												
<p>南海トラフ地震対策では緊急地震速報に留意する。          告知端末機で高度利用緊急地震速報の活用</p> 	<p>住民の防災意識          のバロメーター</p> <p>総合防災訓練参加者の推移</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>参加者数(人)</th> <th>参加率</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H24</td> <td>4,613</td> <td>27.60%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>H25</td> <td>中止</td> <td>—</td> <td>注意喚起</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>4,444</td> <td>35.20%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>H27</td> <td>2,887</td> <td>24.20%</td> <td>防災士130</td> </tr> <tr> <td>H28</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>防災訓練</td> </tr> <tr> <td>H29</td> <td>4,620</td> <td>34.5%</td> <td>復興訓練</td> </tr> </tbody> </table> <p>地区防災計画の策定・防災教育の推進・生業からの参画を促すことが、防災訓練への参加者を増やす。</p>		年度	参加者数(人)	参加率	備考	H24	4,613	27.60%		H25	中止	—	注意喚起	H26	4,444	35.20%		H27	2,887	24.20%	防災士130	H28	—	—	防災訓練	H29	4,620	34.5%	復興訓練
年度	参加者数(人)	参加率	備考																											
H24	4,613	27.60%																												
H25	中止	—	注意喚起																											
H26	4,444	35.20%																												
H27	2,887	24.20%	防災士130																											
H28	—	—	防災訓練																											
H29	4,620	34.5%	復興訓練																											

になると。目の前にビジネスチャンスがあるのに、あなたがサボって仕事をしないだけじゃというふうなことをするわけです。

これが大工さんを本気にする勉強会で、町内の工務店を集めて、さっきのような話から、まず最初に防災から話します。町の防災対策から話して、集めてやるわけです。そうすると大工さん目の色が変わりまして、2年前その登録工務店が10件しかなかったのが33件まで増えてきました。大工さんが本気になることで耐震確実に広まります、進みます。しかも大事なことは、被災後も大工さん必ず要りますので、非常に大事なことだと思ってます。

そして「受援力」、これは AMDA というところの NGO とやってる受援の取り組みですけど、少し長くなりますのでここは省略します。

そして何よりもやっぱりいろんなことを考えながらつくったところで、やっぱり訓練をしなければなりません。地区防災計画も訓練をしなければいけない。

それともう1つ、特筆すべき今の取り組みは、平成29年度の取り組みですけど、揺れに対する取り組みをしています。緊急地震速報というのが南海トラフ地震では非常に有効だと考えておって、昭和のところで起こったら、黒潮町であれば揺れる前に40秒か50秒は時間があります。日向灘であれば20秒ぐらいあると思うんです。その揺れの来る間を利用した訓練ですね、これを29年度からやる予定です。これは全戸に配付されてますので、いいんじゃないかと思っています。

それから、住民の防災意識の話もたくさんあったんですけど、町のほうはどういうふうに防災意識を把握するかというのはもう訓練です、総合防災訓練に何人参加したかをもって住民意識の把握をしようとしております。新想定のときの昼間の総合防災訓練の数が4,073人、31.6%。今年度が4,038、34.5%。この5年間はうちの町では防災意識はそうは落ちてないなという確認しておりますけれど、これを50%までは持っていかなければならないと思ってます。

そういうところで、ちょっと長くなりましたので終了したいと思います。どうもありがとうございました。

(畦地)

ありがとうございました。黒潮町の取り組みの一端をご紹介していただいたわけですけども、ちょっと紹介の途中に出てきました昨年11月に開催しました「世界津波の日」高校生サミットで、山の上で雄叫びの写真が出てきました。参加者全員にアンケートをとったんですけども、プログラムも10何個あるわけですけども、その中で何が一番印象深かったかという、海外の子たちにダントツで1位はあの避難訓練で山の上から叫んだあのプログラムです。これがもうダントツの1位です。

というのは、我々は、松本課長からも紹介ありましたように、学校現場では災いだけを教えるのではなくて、恵みがあるからこそ災いもあるんだということをセットで教えることにしてるんです。そのことがやはりどうも海外の子どもたちには非常に新鮮だったらしくて、やっぱり今からの国民に対する防災教育というのはこうあるべきだというのは、多分彼らはすごく実感をして帰ったんじゃないかなと思うんです。すごく林先生、森本先生のお話の中にもありましたように、怖いということだけで防災教育を終わってはやっぱりだめなんだということは、すごく大事な要素なのではないかなというのを、改めて私も感じたところでした。

これから、そんなに議論する時間ないので、もう僕が一方的にお三方に聞くだけの話になりますけれども、フロアのほうからご質問いただいておりますので、少しそれをもとにお聞きをしたいと思いますが、ちょっとまず森本先生です。

1つ目が、「てんでんこ」のお話がありました。釜石東、鵜住居の子たちが逃げているお話の中で、ちょっと引き返して保育園の子等を助けたというお話がありましたですね。そのことに対して、その戻ったことに対して、「てんでんこ」で逃げろと言われているのに助けに行ってもいいんですかって、ちょっとそういうご質問がありますが、これについて少し何かいただければと思います。

### 「てんでんこ」で逃げろと言われているのに、助けに行ってもいいの？

(森本)

講演の中でご紹介させていただいた女の子は、すごく「てんでんこ」のことを頭に入れていた。なので、今なら戻っても大丈夫と一瞬で判断したと言ってました。なので、戻って子どもを抱えた。だけど、今度急な坂を登るときに、このままだと自分の体力が尽きてしまうかもしれない、津波に追いつかれてしまうかもしれない。そのときに周りをパッと見たら自分よりも体力のある大人の男の人がいたので、その人に「この子をお願いします」と渡した。そうすると、自分より体力があるので、さらに逃げ切れるだろう。「それってどういう判断だったの」って聞いたときに、私の頭の中に、結局助けられる人から助ける人へ、だから、何とか少しでも人のためっていうことと「てんでんこ」があったので、一瞬一瞬時にそれを判断したというふうにその女の子は言ってました。

実は、この女の子は、震災前に釜石東中学校でいろいろ取り組みをしているときに地域の方から「てんでんこ」、いわゆるたとえ家族が心配であっても戻ってはいけないんだという話を聞いたときに、私は納得できなかった。大事な家族をなぜ迎えに行ってもいけない、見に行ってもいけないのか。いくら自分の命が大事だと言われても、家族のことが当然心配なので家に戻ってしまうこともあるんじゃないかと引かかっていた。

でも、ずっと自分の中で、どうやればじゃあみんなの命が助かるのか。そうだ、家族会議を開けばいいんだ。ということで、その子、中学校1年生の子が主催して家族会議を開いて、いざというときにどうするのか。家族で避難経路も見に行ったら。そのときに、その女の子はお父さんとお母さんに向かって、「もしも私が学校にいたときに災害が起きた、津波が来そうだというときには迎えに来ないでね。私は私で逃げるから、お父さんはお父さんで逃げてね、お母さんはお母さんで逃げてね」っていうのを震災前に確認したと。

実際あのときに大きな災害があったわけですが、お父さんは釜石の町場のほうにいたんですね。やっぱり迎えに行かなきゃと思ったそうです。だけど、娘のその言葉を思い出して迎えに行くのをやめて、会社で言われている避難場所に逃げて、もしも迎えに行ったら、迎えに行った先が先ほどの見た映像です、どうなっていたか。残念ながら、岩手県では、保護者の方が迎えに来て引き渡した後、子どもさんが亡くなるというのが一番多かつ



たんです。なので、ほんとにその震災前のそういった取り組みがその子の学びになっていた。そして、家族を巻き込んでいっていたというところでした。

(畦地)

ありがとうございました。率先避難者だったり「てんでんこ」というのは、必ずしも何が何でも振り切って逃げろという話ではないということですよ。要は、ですから非常に状況判断、その時々判断をどうできるかという子どもをつくっておくかということですね。そうすると、普段のもう知識のうえの訓練、体がほんとにあの状況判断をしてある意味勝手に動いたってということなんですか。そこまでのやっぱり準備ができていたから、その判断ができたということだと思えますね。

森本先生、もう1個お願いします。今、復興計画づくりをしている中に、その議論の中に子どもたちがかかわったような事例がございますか、ということですけども。

### 復興計画づくりに子どもたちがかかわった事例があった？

(森本)

そうですね。例えば今日ご紹介した野田村のメモリアルパーク、いわゆる沿岸部に公園をつくるというときに、子どもたちの意見を取り入れて反映させようというふうな取り組みですとか、ほかの地域でもやっぱり多いのは公園づくりであったり、まちづくりの中で子どもたちがかわれる部分について積極的に意見を聞こうというのは、ほかの市町村でもやっぱり見られています。やっぱり子どもの発想だったり、やっぱり子どもがそれに主体的にかかわることで、その次のこのまちづくりを担っていくというところへの意識づけにもなっているのかなというふうには思います。

(畦地)

ありがとうございました。

それでは、次のご質問です。これは、森本先生、林先生お二人にですけれども、僕もお話を聞きながら思ったことをずばりこの方が似たようなことを書いていらっしゃるの、興味深く読んでたんですけども、どういうことかと言いますと、復興教育は被災後の教育、防災教育は被災前の教育、どちらもふるさとへの思いを育む、地域とつながるという共通点があると思います。

つまり僕が思っていたのは、復興教育ってやってる内容って結局事前にもやっている内容で、必ずしも復興、つまり被災しないとできない教育ではないですよ。共通点があるんですよということをこの方はおっしゃってるんだと思いますけど、逆にじゃあ被災をしたからできる、できるというか、異なるところ、あるいはこの方はそれぞれ難しさがあればということなんですけども、森本先生の立場、林先生の立場で、共通点とは別に異なる点、やっぱり被災後だからできた、被災前からできた、そういうようなことがもし何かありましたらお願いをしたいと思います。

### 被災後の復興教育と被災前の防災教育の共通点と異なる点

(森本)

そうですね。ちょっと答えになってるかどうかわからないのですが、確かに岩手県でも復興教育と

いうことで震災をやっているんですが、じゃあ防災教育とどう違うんだとかってのは県内でも出ます。そこは震災前から取り組んでいって、やっぱり継続して大事にしなきゃいけないというのもありますし、今おっしゃったように、震災があったからその大事さが余計分かった部分もありますし、その復興のプロセスに子どもたちがかかわっていくというところですね、そこがやっぱり大きく違うところですね。

ただ、でも、それはある意味強靱な、先ほど出た黒潮町のまちづくりにかかわるといこととは共通するんですけどね。震災があって、大変な町をまたもう1回つくり直す。それは次の災害に備える部分もありますよね。なので、そういう意味では、震災前であっても、防災と言ったときにまさにまちづくりに、子どもたちが地域づくりに主体的にかかわっていくことというのは共通していくんじゃないかなと思います。

同じようなこととして、私ぜひ大事だと思っているのはやっぱり心の心理教育も大事で、やっぱりあれだけの大きな災害を受けて、その中を子どもも大人も何年もある意味震災と向き合って生きていかなきゃいけないわけです。すごい心のダメージを受けると思うんです。心のメカニズムってこうなっているんだ、それをやっぱり理解できたうえで、じゃあこういうふうにやっていこうという。これは実は大きなストレスがかかるので、実は私たちはストレスの中で生きてるので、それがものすごい巨大なストレスになるわけですね。

でも、これは考えたらほんとは普段からやっておかなければいけない問題で、よく岩手県では震災が起きて、起きてというか、これからもしかしたら起きるかもしれないところもやっぱり心理教育はやってたほうがいいよね。やっぱり心の復興というのが一番最後、一番大事な部分になってくると思うんですね。岩手県でも建物とかいろんなものができても、心の復興がいかにかつらぬか。岩手県では、心の教育と合わせてセットで復興・防災をやっているんですが、これはある意味震災が起きたからなんですが、ほんとは起きる前にも大事な部分なんだろうなというふうに思っているところでした。

(畦地)

林先生、お願いします。

(林)

やっぱり和歌山県はまだ地震・津波、今のところ被災してないので、子どもたちの教育の中でまず地震への備え、こういう準備しといたほうがいいのか、家・家具はこういうふうにしといたほうがいいのかというのはやっています。避難について、地震が来たときはどういうふうに避難すべきであるかという教育も、ここはすごく力入れてやっているとところだと思うんですけども、その被災した後の復興教育は正直なところこれは絶対必要だと思います。例えば学校が避難所になって、そこで自分も避難している一員となったときにどういうふうな行動を、小学生であればできるのかとか、その後の町をどういうふうにしていったほうがいいのかというのは絶対必要だと思いますけど、正直今まだ全然できてないような状態です。でも、それは絶対必要だと思います。

(畦地)

ありがとうございます。もう1個、僕宛の質問なんですけど、僕が答えるよりも松本課長に答えてもらいましょうか。高知の人は、高知地元大好きな人が他県より多いと思います。そういう意味では、地域を好きになる防災教育は取り組みやすいですか。

(松本)

そう、高知以外の事はあんまり分からないですけども、確かに高知の人は地域自慢する人も多いかもしれないですね。ということは、ローカルナショナリズムが強い地域なので、やり方によっては取り組みやすい地域かもしれないですね。以上です。

(睦地)

そうですね。ちょっと他県に住んだことが僕もないので、そこな辺どうなのかな、ちょっとよく分かりませんが。

質問は以上だったので、とりあえず私のほうから気のついたことを少しご質問させていただきたいと思います。今日ほどどちらかというと防災教育というところに視点を当てています。防災教育と学校教育ですね、特に義務教育、小学校・中学校、あるいは高校教育、そこら辺との関連性にフォーカスをしながらお話をさせていただいたんですけども、先ほど林先生のお話の中に和歌山県の学校教育の目標でしたかね、あれのご説明の中で防災教育がよく考えると単独で独立してあるのではなくて、防災教育が学力のこととかいじめのこととかいろいろも包括をして活用できるのではないかというような感じのお話があったかと思いますが、そこら辺少し真意を詳しく話ししていただけないか。

## 防災教育は学力・いじめにも通じる

(林)

これは防災教育に限らないと思うんですけども、何かをやっぱり突き詰めて考えていくと、例えば私は若いころは体育を専門にというか、体育を勉強してたんですけども、体力を高めるというのはやっぱり教師が何かいろいろ技を教えてだけじゃないんですね、子どもが自ら自分で進んで考えていく。そういうふうなことを自分らで班に分かれて、次から次へとこんなことをやろうって計画したりとかってというのはやっぱり教師主体ではできない。自分らが主体的に考えていく。そういう子どもを育てることは、体育の中でも防災教育をもっとしても同じなんやと思うんですよ。

突き詰めてやっていくと、防災教育はそうやって自分で考えて自分で判断して、弱いものも助けて、やっぱりいじめにも通じるというところがあるし、もうすべての教育というのは何か、特に防災教育というのはその枝というのがすごい多岐にわたっているなど、もうさっき言ったことと大体同じなんです



けども、上手にお答えできませんけど、僕の中では、もう防災教育を進めていけばいろんな成果が絶対間違いなく上がってくるっていうのは実感してますし、実際にそうなってます。

(畦地)

ありがとうございます。うちの町も、小学校・中学校には年間10時間以上の防災教育やってねとお願いしてるんです。今学校には、〇〇教育というのはたくさんあるんです。なので、私たちが例えば防災教育って先生方にお伝えをすると、上積みをされたような感覚になるんですね。それってやっぱりすごく負担感が強いと思うんです。今まで例えば200時間やってたところに、また10時間足すんですか。そろそろまた英語教育も入ってきますよ。

そんな感じで、先生すごく負担感があるんですけども、自分たちが今先生方をお願いしてるのは、いや、そうではなくて、今やっている、教えてる内容を少し防災の要素を入れてみる、防災の視点から組み直してみる、あるいはふるさとを好きになるような教材に変えてくださいと。そういうのを先生方をお願いしてるんですけども、なかなか先生方って今までのやり方をすっとう変えませんか。その点、非常に逆に苦勞されてるんだと思いますけれども、そこら辺、森本先生、岩手のほうではどのように工夫をされていらっしゃるのでしょうか。

## 岩手県の小学校・中学校での防災教育の取り組みの工夫

(森本)

もうまさにおっしゃるとおりですね、自分もずっと学校現場なので、あと教育委員会にもいたので、〇〇教育があまりにも増えていて、もう学校は「また新しいことをやるんですか」という、復興教育にしても防災教育にしても同じです。で、もう自分は、いや、そうじゃないです、〇〇教育じゃないんです。これを通した人づくり、さっきはまちづくり、地域づくり。この〇〇教育を通した人づくりということで、みんな同じ方向に、先ほどの林先生と同じなんです、全部同じ方向に行くので、もう今やっていることを教訓をもとにもう1回振り返ってもらえればいいんです。各教科の中に防災なんかいっぱい入ってるんですよ。学校は地域と連携するようにどんどん言われているんです。

だったら、そのやってることをもう1回防災、防災がいいところって変ですけど、やっぱり究極



的に命にかかわることですね、自分の命もそうだし、家族や地域の人たちの命にかかわるところなので最優先になるところなんだと、命に勝るものはないんだと。だから、岩手の復興教育の1丁目1番地に命の尊さを持ってきたんです。すべてここから始まって「かかわる」や「そなえる」があって、そして自分たちはどう生きるのか、また生きるに戻るんだというふうな説明も時々するんですけど、生きるに始まっ



て「かかわる」「そなえる」があって生きるに戻るといふ、それは生き方にも戻るといふふうには学校には言うんですが、で、見直してくださいといふふうな言い方をしています。

実際、釜石東中学校、震災前にやる時も片田先生のまさに薫陶を受けて、自分の命は自分で守るんだと。そして、津波はたまに来るけど、これほど魅力的なふるさとはないんだというのが市としても大きく掲げられてたんです。だから、自分はそれ非常に共感して、やるときにもう既にやってるやつがあったので、例えば地域のためにとってボランティア活動ってやってたんですね。じゃあそれを防災でやろうとか、そういうふうな置き換えで確かにやってたので、そこは非常に大事な視点だと思います。

(畦地)

今お話の中にありました地域とつながるといふ点ですね、お三人の話に共通してるのは、やはり学校だけでは防災教育はできないということだと思うんですよ。さらに学校と地域が連携するとより防災教育、双方ですね、学校も地域も、地域の防災力、学校の防災力、それが何か1足す1が2じゃなくて何倍にもなるといふのを多分実感をされているんだと思いますけれども、そこら辺で具体的な事例といふのを、すみません、松本課長、町内にありましたらお願いしたいと思います。

## 防災教育には学校と地域の連携が必要

(松本)

事例としては、分かりやすいのは、先ほど話した避難訓練のときにこの人は絶対来ないと地域でレッテルを張られた人、この人は子どもさんに言われると来るんですね。おそらく避難訓練を地域住民の方、甘く見てる方が結構多いですね。しかも海に近い生活をしてる人ほど甘く見てる例が多いんじゃないかと思ってることもあります。非常にこれ危険だと思っておまして、やはり訓練しっかりやらなければならないと思っておまして、先ほどの質問で東日本の直前の話がありましたけれど、やはりどうして訓練に住民の方が参加してくれないのだろうという悩みは、自治体すべての防災にかかわってる方の悩みではないかと思うんですけど、その面で見るとほんとに子どもが持っているその力、そしてもう1つ、子どもが持っているのは将来の住民なんですね、悉皆制で教育されてくる。そういうところに非常にもう教育が最も防災の中で効果がある一面ではないかと思ってます。

(畦地)

林先生の事例ございますか。

(林)

地域のおじいちゃん、おばあちゃんは、子どもが地域へ入っていくとすごく喜んでくれるんですよ。この前、うちの小学校の3年生が老人ホームに劇をしに行ったんですよ。小学校3年生になってくると、これ防災とはあまり関係ないんですけども、1年生は学校でみんなからかわいいかわいいと言ってもらえるんですけども、3年生ぐらいになったら誰からもかわいいって言ってもらえないんですけど、老人ホームへ行ったら、みんなおじいちゃん、おばあちゃんからかわいいかわ

いいって言ってもらえるんですね。お年寄りにはすごく喜んでもらえるし、子どもたちも「かわいい」って言われたってものすごく喜んで帰ってきたと。

例えば地域の防災マップ作るときに、地域の敬老会の方をお願いして、一緒に班の中に入れてもらって地域と一緒に回ってもらうと。これは子どもたちもすごくありがたいし、学校もありがたいですし、お年寄りもすごく喜んでくれます。だから、今まで私の学校のかかわりはそういうような感じですかね。これももう絶対もっともっと広めていければいいなと思います。

(畦地)

森本先生、ございますか。

(森本)

講演と重なるんですが、やっぱり訓練に子どもたちが来ることで保護者の方も来る。これは学校と地域が一体となってる大きな意味かなというふうに思いますし、先ほどもちょっと説明したんですが、まさに大槌町のあの木碑ですね、あれについてもさっきちょうど黒潮町のチラシに出てた大槌町の安渡町内会で自主防災計画なんかをつくってる佐々木さんのお話を伺った中でも、大人が中心にやるところに高校生がああいう木碑をつくろうというアイデアを持ってきて、やっぱりそれを町の人と一緒にあれを建立するんですけど、先週の建て替えのときも私そこにも行ったんですが、高校生ももちろんいるんですけど、もう町内会の高齢者の方々とかほんと張り切ってますよね。もうその高校生のアイデアを今度自分たちが建立すると。

ちょっとあの木を建立するのにあんな高いところ上がって危ないかなと思うところに一緒に上がって、高校生も一緒に上がって、やっぱり高校生と一緒にあれを建立するという、地域の方にとっても何ですか、すごいやっぱりエネルギーが、私それを見たときに高校生がそこにいて一緒にやるということが、地域の人たちが自分たちの防災をやっていく大きなエネルギーになってるんじゃないかと。あれ高校生いないで、地域の人たちだけでやってるのは多分えらい違い、だんだん地域の人張り切ってるので、周りから上がってる方に「ちょっとあんた降りなさいよ」と、「高校生にもっとやらせてあげなさいよ」という、もうそれぐらい雰囲気がいよいよよくなっていて、よく大人の中に子ども1人いるとそれがものすごい笑顔を生み、その人たちのエネルギーになるという話を社会教育の立場から聞いたことがあるんですが、それはまさにあの木碑のときを見てもそう思った次第です。

(畦地)

先ほどうちの地区防災計画シンポジウムの話がありましたけども、2回しかまだやってないんですけども、これまで小学校2校、大人の前で子どもたちの取り組みを発表してもらいましたけれども、それ見て実感するのは、役場の職員が防災の大事さを100回言うよりも子どもが一言言うほうがよっぽど効果があるということですね。それはその場に参加をしていた全員が実感したことでした、町長も当然参加してたんですけども、今私たちのほうでやってるのは、子どもたちが地域の大人向けの講師ですね、防災の講師、それになるようなプログラムをぜひ学校のほうで組んでいただきたいということを今お願いをしているところですけども。

ほんとに高校生、防災だけではないんですね。子どもたちのブランド力と言いましょうか、例えば高校生が開発した何とかが一番先に行列ができるじゃないですか。実業高校なんかで何かハムとか、うちの幡多農高でも売ったりしますけれども、もう行列で買えないんですね。それぐらいやはり子どもたちが持っている力って、あれ何なんでしょうかね。多分同じものをつくって新しい商品できましたって、例えば僕たちがやっても誰も振り向きもしないのに、どこそこ高校、どこそこ中学生何年生のグループが作りました言ったら、もうすぐ新聞に載ってもう注文が殺到するみたいな、そういう子どもたちの持っている力、ものづくりだけじゃなくて防災教育に関してでもですね、これは一体何なのかなというのを、これはやはり教員の立場の方に聞かないと分からないんですけども、林先生どう思われますか。

難しいですか。

(林)

難しいですけど、やっぱりもうほんとにそのとおりでと思います。はい、何か答えようがないんですけども。

(畦地)

森本先生、どうです。

(森本)

すみません、ちょっと長くなってあれですけど、震災の前に釜石でいろいろ取り組みをしたときに、まさに先ほど松本課長さんがおっしゃった漁師の方はちょっと海に対して、実は鶴住居地区で新たにした、ほんとに震災の1年ぐらい前に津波避難の家構想、「こども110番」ってありますよね、不審者の人が来たらぱっと逃げて助けてもらう。あれの津波版をつくろうと群馬大学で釜石市役所が考えたわけです。例えば子どもたちが当然あちこちで遊んでいるので、必ずしも自分の家だったらここだって分かるんですけど、友だちの家とか、学区広がってたのでエリアが違ったりやっぱりすぐにどこ行けばいいか分からないときもありますよね。そういうときにそのシールを張った家の人とかは一緒に逃げてくれる。注意報や警報が出ても一緒に逃げてくれると。

それを市として説明会をやったんです、公民館で。そのときに釜石東中学校と鶴住居小学校はどんな防災教育をやっているか、それも発表した。その津波避難の家構想の説明会のときに、地域の方から「やりたいことは分かる」と。だけど、おれたちいちいち注意報ごときでは逃げられないってなっ



たんです。ある人から「おれはやっぱり漁師だ。海の近くで住んで生きてる。海のことはおれたちのほうが分かってるんだ」と。だから、ちょっと空中分解しそうになったんです。そのときに別の人が、民生委員さんが手を挙げて「子どもたちがこんなに頑張っているんだから、やっぱり私たちも協力しなきゃいけないんじゃないか」ってなりました。そしたら一気に空気が変わって、その構想に協力していこう。

その後、震災前だったんですけど、地域の人と私が釜石東中学校とか地域とともに取り組んでいたことを県内で発表する機会があったときに、その方が数字を出したんです。地域の人の人数の中の子どもたちと。この子どもたちをやっぱり救っていかなくちゃいけないんだと、未来につながるこの子どもたちの命をつないでいかなくちゃいけない。だから、我々は地域を挙げて防災を協力するんだということを、自主防の会長さんがおっしゃったんです。

子どもたちが持つてる力ってやっぱりほんと輝く、もう大人からするといろんな力を持つてるんですけど、やっぱり震災もあって、あの後に一番に言われたのが、よく学校で取り組んでくれた、よく子どもたちが生き延びた、もしもあの中で子どもたちの多くの命が万が一失われていたら、我々は復興に向けてこんなにエネルギーをかけられなかった。やっぱり未来を託す子どもたちが生き残ったからこそ、次の復興、まちづくりに向けてやっていかなくちゃいけないんだと。

その答えにはもちろんなってないですが、やっぱり次の時代に、次の世代につないでいくというか、すごく大きな未来を託すやっぱり力というの、もちろん守るというのもあるんですけど、幼い子どもたちの命を守るというのもあるんですけど、未来に引き継いでいく、そういった力もあるのかなというふうにやっぱり、すみません、答えになってないですけど、いずれもう子どものためだったらというところは非常に大事な部分になるのかなというふうに。

(畦地)

前々になりますかね、県の教育長だった大崎さんという方の著書の中に、『子どもという希望』でしたかね、子どもという名の希望か、何かそういうタイトルの本がありました。子どもというの、もう存在自体で希望なんだということですね。ですから、今お話聞いていて思ったのは、少しお話の中にも子どもたちが希望というタイトルのあれは壁新聞か何かですかね、ですね、ありましたけども、新聞ですね、大人は多分子どもを見ただけで、要は希望を感じると思うんですね。ですから、子どもたちが言うことに反対できない。



言うたら反対する気持ちが起きないんですね、多分ね。子どもたちの言うことはほんとにそれを支えたいという気持ちを、何か人間が持っている、何いいますかね、魂の次元の願いというものを子どもから引き出されるんじゃないでしょうかね。

そうしますと、うちの松本防災課長の話の中でもありましたように、防災にも強い町なんですね、防災にだけ強い町ではなくて、防災に強い町ではなくて、防災にも強

い町というのは、「にも」ということはほかにも強いということですよ。では、その防災にものほかは何でしょうか。

(松本)

難しい質問ですね。例えば町が元気になるすべてのことだと思っんです。多分子どもたちも、その保護者の方もやはり住んでる町好きだと思っんですよね。それ防災だけ強い町というのはあまり好きではないんじゃないかと思っんです。だから、いろんな魅力がある町にすることが必要であって、防災はいろんな施策の中の基本的な部分の施策、命にかかわる基本的な施策ですね、であるので、それがすべてだという勘違いをしないほうがいいんじゃないかと思っってます。

(畦地)

多分こういうことだと思っんです。さっき両先生のお話の中にもありましたように、当たり前のことを当たり前、結局防災教育って特別なことではないということですね。防災教育でずっとご説明した内容を見てみると、例えば学校であれば学校教育で当然やらなければならないこといっぱいあって、震災にこれから被災するかもしれない地域だからとか、あるいは被災した復興しなければならない地域だからとか、だから特別にやらなくちゃいけないことって何もないんです。すべて結局学校教育であれば学校教育で当たり前にやらなくちゃいけないことがずっと羅列をされている。ということは、今おっしゃった防災にも強い町というのが、防災に強くなる町を目指すのではなくて、いろんなことをやった結果、結果として防災にも強いということだと思っんです。

そうしますと、ちょっと僕も話長くなって申し訳ないんですけども、本日のテーマなんですけど、「防災を通して学ぶ新しい時代の生き方とまちづくり」って、これ僕が考えたテーマなんですけど、分かるようで分からないんです。どういうことかって。何で分からないのかなって思っんですけど、実はちょっとどうもここに3文字ないんです。何がないかと言うと、「学ぶ」というところと「新しい時代」の間に、これ「古くて新しい時代」ですね。多分私たちが今目指しているのは、かつて持っていた地域コミュニティであったりとか、地域のお互いの関係性ですね、近所づきあいとか親と子の関係とか、地域で子どもたちを育てるとか、そういうものを多分この防災教育というのは目指しているような気がします。

ですから、今日ここで説明した事例というのは、決して先進的なことではなくて、かつては当たり前だったのかもしれない。したがって、この古くて新しい、つまり何か特別なことをしているのではなくて、ほんとに当たり前のことを当たり前にするんだけど、その当たり前がなかなかできない時代ですか、さっき松本課長のほうから例えばさっきの避難倉庫に家庭のものをパッキングして1個1個入れるって当たり前のことなんだけど、実はなかなかできるところがいないとか、そういうことがどうも防災のポイントかなと。つまり何か奇抜なことをするのが防災教育だったり防災対策じゃないのかもしれない。というのを、お話を聞きながら感じたところです。

学校教育では「凡事徹底」という言葉よく使われますか、森本先生のほうとか林先生のほうでも。あまり使わないですか。使わないです。要は、当たり前のことを当たり前にしましょうという話なんですけども、けど、学校現場でもやっぱりちゃんとあいさつができるとか、この前、定年の校長先生がいらっしゃって一緒に飲んでるときに面白かったのは、玄関に入って子どもたちの下駄箱が

あるじゃないですか、あれがきちっと揃ってる学校は大体学力が高いという話がありました。次から行くときは必ず玄関の下駄箱を見ようと思いましたが、やっぱりそういうことってありますでしょ、林先生、何か思いつくことができましたら。

(林)

やっぱり今私の勤務校へ来て思うんですけども、人数少人数で少ないのもあるんですけども、やっぱり上履きをきちんと揃えてるとか、トイレのスリッパがいつもきちんと揃ってたりとか、掃除も少ない人数でやるからやらざるを得ないというか、だからやっぱり学力も高いです。そういうところはもう顕著にいろんなところに出てくると思います。

(畦地)

森本先生。

(森本)

震災前に防災教育を片田先生から指導を受けて、どうやって学校でいこうか。子どもたちとともに地域の、いわゆるチリ津波を体験した方とか、中にはやっぱり昭和8年の三陸大津波を経験された方もいらっしゃるして、その方にいろいろ体験談聞いたときに、最後の最後に「でもね、大事なのは普段の生活だから」って言われたんです。例えば靴をきちっと玄関に揃えておく。何でだか分かる。いざというときにすぐに履けるようにと。例えば枕元にちゃんと服をたたんでおく。たとえ夜中に大きな揺れがあって、電気がつかなくてもぱっと取って着れるようにする。普段のそういうちょっとした生活が大事なんだって言われたときに、私も生徒も目からうろこというか、ああ、そうか、大事なことはそういうことなんだというふうに思ったのがありました。

なので、学校としても非常にそれは大事にしていました。あいさつも、防災をやる前からあいさつなんかも非常に大事にしていたんですが、ある生徒に安否札というのを、私の家はもう避難しましたというのを玄関に張ればいいと、これ中学生のアイデアだったんですね、震災前。それを地域に生徒たちが配ったんですが、それで震災の後、今インタビューしてる中で、ある生徒に「あれは非常によかった」と。中学生ぐらいになると、地域の人になかなかあいさつできないと。あれを持って行って、「こんにちは」って当然話をしなきゃいけない。そうすると、次会うときにあいさつをしたり、やっぱりそれがコミュニケーションや地域とのつながりの一助になっている。

私、あの安否札の効能というのはコミュニティ再生のちょっとしたつながりに、緩やかにつながっていく1つの手になるんじゃないかな。それを全世帯配る計画の途中で震災があったので全世帯は配れなかったんですが、全世帯が当時3,000世帯あったので、3,000世帯、頭の中で当時240～250生徒いたので割って行って、1人4～5軒で1,000軒なんで3年あれば全部配れるという構想だったんですが、ちょっとそれは実現する前に震災があったんですが、そういったつながりで当たり前のことが再生されていく。それが地域の力になっていくんじゃないかなというのを、震災前だったんですが感じたところでした。もう今も当然、震災の後の復興教育なんかでもあいさつだとか普段の生活をちゃんとしていくことを、もういっぱい学校の取り組みで行われているところです。

(畦地)

学校ほんとに高齢者とかの取り組みも、例えばうちの町でいくと高齢者にお手紙を出すとかそういうのをやっていますけども、やはりそれを少しちょっと何か発想を変えるだけで、お手紙を持っていく中に工夫を入れるとかいうともうよほど効果が抜群に高いということですね。高齢者に対する効果もそうですけども、防災に関して。

ですから、話また戻りますけれども、防災教育ってほんとに何か特殊なものでは全くなくて、我々の日常の延長にあるものだというのをほんとに僕は実感します。例えば片田先生がおっしゃる3原則ですね、「想定にとらわれない」、それから「ベストを尽くす」「率先避難者たれ」、これ考えてみると、人生ってそうじゃないですか。人生って想定外のことがばかりでしょう。ねえ、小学生・中学生・高校生・大学でなくて、おれが60までこんな人生歩むって、予定どおり来られた方いらっしゃいます。想定外のことがばかりですね、人生っていうのは。

それから、やはり人間として必要なのは、その場その場でやっぱりベストを尽くすことですよ。子どもたちに「いいんだよ、適当でいいんだよ、ベストを尽くさなくていいんだよ」とは言わないですよ。「生きていく限りはすべてベストを尽くしなさい」と言いますよね。それから、何でも率先してやりなさいと。「人に言われてからじゃなくて、率先してやりましょう」と言いますよね。

考えてみますと、これって防災教育のときだけ必要な3原則ではなくて、私たちが生きていくうえで当然必要な3原則というふうに考えれば、ほんとに防災教育というのは日常生活の中に当たり前があって、それが毎日毎日そんないつ来たら逃げよう、どうしようって考えるとこれ大変になるので、そうではなくて日常生活の中に自然に組み込まれていくような、防災が子どもたちも私たちも当たり前の中に生活の中に取り入れることができれば、これはほんとにいざというときに強い家庭なり地域になると思うんですね。そういう工夫というのをやっぱり我々大人も含めて、今からやっていかなくちゃいけないのかなと思いつつ聞いたところです。

少し最後、もう時間ないので、最後にお三方に、それぞれのこれからの防災教育あるいは復興教育あるいは地区と学校との連携等々、こういうふうにしたいんですけど、こういうふうなことを考えてますということなのでいいですので、1人2分程度で最後お話ししていただいて終わりたいと思いますので、森本先生からお願いします。

(森本)

これからの復興教育・防災教育ということで自分なりにちょっと考えているところなんですけど、まだまだ復興道半ばという部分もありますし、地域の今後を考えたときには、例えば阪神・淡路大震災の後、復興特需の後に長い低迷期に入りますね。そうすると今工事とかが長引いているので、阪神・淡路に比べれば長い期間、復興特需が続いているわけですが、もうそろそろこれが下がっていくのが見



えてきているわけです。そのときに、地域としては多分地域経済そのものもちょっと苦しくなる状況が来るとというのが予想されると。その中でやっぱり次の地域づくりや未来に向けての取り組みが必要なんじゃないかというふうに思います。

そうなったときこそ、先ほどちらっと言ったんですけど、宝来館のおかみさんが「先が見えてきたからつらい」ってぼそっとしゃべったんですよね、ちょっと涙ぐみながら。初めて震災の後、人前でちょっと涙が出てしまったというふうにおっしゃったんですが、あのおかみさんがそう言うぐらいだから、やっぱり相当ちょっとつらい部分もあるんじゃないか。そのときに頑張ろうというふうな意欲だったり知恵はやっぱり学校や子ども、まさにその希望を持つ子どもとのかかわりも出てくるんじゃないか。それは学校教育のサイドから、そういうのを踏まえたうえでかかわっていく必要があるんじゃないかというふうに思っています。

もう1つは、震災から6年経つと、もう小学校の1年生とかは震災後の子どもたちが入ってくるんですね。やっぱり簡単に記憶というのはどんどん失われていく、次の世代につないでいく。黒潮町でもうまさにやられている部分を岩手でもやっていく必要がある。私としては黒潮町に何回かお邪魔していて、むしろ学ばなければいけないんじゃないかっていうふうな思いでいるところです。

あとは岩手としては、この間台風10号の大きな災害があって多くの方が亡くなった。岩泉町は海にも面しているところで、東日本大震災で被害を受けたところだったんです。にもかかわらず、テレビでも出ましたが、老人ホームの方々とか含めて20の方がこの台風災害で亡くなって、まさかこんなふうな台風災害になるとは思わなかったというふうな、そうすると津波だけではないと。やっぱり災害はいろんなものがあるので、みんなでそのさまざまな災害に対応していけるような力を身につけていく必要がある。

あとは、実は私、最初の自己紹介で言うの忘れたんですが四国の出身なんです。香川県の出身で地元東かがわでこの間講演をする機会があったんですが、あそこも震度7を想定をされていて津波も来る。非常に耐震率も低くて、結局あっち側、もうちょうど黒潮町からするとほんとに斜めのところ、距離的には反対側になるんですが、やっぱりこれからの災害が想定されている。東日本大震災の教訓をある意味縦の時間軸の部分と横の部分ですね、まさにこれからまた起こり得る部分が危険が考えられてる地域にやっぱりいかに伝えていって、みんなでこの災害を乗り越えていけるのかっていう次の世代に引き継ぐことと、そしてまさにこれから起こり得るところにもその教訓を少しでも伝えて、お互いに学び合えていけるようにできればというふうに思っています。

なので、今日も非常に貴重な機会をいただいて、今後岩手としてもできることをどんどんやっていきたいと。そこにはキーワードはやっぱり「学校・家庭・地域の連携」、これはもう欠かせないことだと思っていますので、ぜひそのあたりも進めていければというふうに思っております。

(畦地)

林先生、お願いします。

(林)

4年ほど前に、家で息子と2人有的时候きに町に震度4の地震があったんです。震度4ですから結構揺れたんですけどもそれほどでもないという、私的にはそういう感じだったんですけど、息子



は素早かったですね。揺れ始めてすぐにテーブルの下に入りました。それを見て、私もテーブルの下に入りました。揺れが収まるまでテーブルの下にいて、揺れが収まったらテーブルから出て、すぐに自分のゲーム機とペットボトルの水持って「お父さん、逃げるぞ」と言って走り出しました。私ちょっとテレビ見たい衝動に駆られたんですけども、それはやめて、多分それ



ぐらいの揺れでは津波は来ないと思いながらも、やっぱりこれは逃げなきゃいけないと息子と2人で避難所の山へ。山へ上がっていこうとしたら、中学生の女の子が3人来てました。どうしようかなという感じなので「一緒に逃げよう」と言って、息子と中学生3人、もう周りの人は誰も逃げてきませんでしたけど山の上へ行ったら、「偉かった、賢かった、これ津波来るかどうか分からないけど、絶対これが大事なんだ」という話をしたんです。

私の目標は、やっぱり学力も上げなきゃいけないし、地域も大事にしなければいけないし、もういろいろそれは全部やりたいんですけど、やっぱり自分にかかわる子どもたち、その保護者、地域の1人でも多くの命を守ること。これも片田先生に教えてもらったんですけども、防災の授業をして、津波が怖いよ、地震が怖いよって、それだからって人間ってほんとには逃げないと。じゃあどこ、その授業の中で子どもたちにほんとに逃げるようにするには何が必要なのかって聞いたたら、その授業をやってる先生の熱意だと、本気度だと、もう何が何でもおまえたちを助けたいんだという熱意があったときに、子どもたちはほんとに動くだろうと言われたんですね。だから、自分が授業をするときにはもう常にそういうつもりで、これからもそういうつもりで1人でも多くの命を救いたいっていうのをもとに防災教育をまた進めていきたいと思います。

(睦地)

松本課長、お願いします。

(松本)

黒潮町、私、防災課長になる前に何をやってたかという、総合振興計画の仕事をしてた。これが一番役場の人生の中で長かったわけですけど、町の第一次総合振興計画の書いてるところは「千年に耐えられるまちづくり」なんです。「千年に耐えられるまちづくり」を基本にしておるんですけど、その後、防災担当になって南海トラフ地震に対する基本的な考え方のまとめの中で、さまざまな具体的な施策をいってます。これから現実的に南海トラフ地震を迎える現実としてやらなければならないことはたくさんあって、それを1つずつこなさなければ、命も守れなくて千年も耐えられる町できないんですけど、ただ、できるだけその機会が遅く遅くなしてほしいなという

願望を持っています。

ただ、もう1つ、南海トラフ地震対策の基本的な考え方の中には「南海トラフ地震とは闘わない」と言っています。「闘う」という言葉使っていないです。これは当初その言葉を使わないということを議会で言ったときに、不謹慎であるというふうに言われたんですけど、そのときに、いや、けど、24時間365日34.4メートルと闘う町という気持ちいいですかいうふうな感じで言ったら、とてもやないけど気持ち悪いわけですね。だから言ったのは、自然とうまくやっていく、人と自然のつき合い方をうまくやっていく発想なんですね。だから、闘うという言葉は南海トラフ地震とうまくつき合うという言葉に置き換えたんです。

それで考えてるのは、明神水産がカツオのタタキ売ってるコマースル見ると「自然とうまくやっていく」という言葉が出ると思うんですけど、それと一緒にです。先ほどの質問の中にあっただよりに、防災だけに強いんじゃないくて、防災にも強い町というのはそういうふうな考え方のまちづくりであるというふうに理解をいただければ、先ほど私がちょっとしゃべり損なったことを補足できるかなと思っております。以上です。

(畦地)

ありがとうございました。3名の方に最後のご発言をいただきました。このシンポジウムは震災翌年の年から、2012年から大体この2月3月ぐらいに開催をして、今回で6回目ということになります。産業のほうとか事前復興とかいろんなテーマでやってきましたけども、今日のテーマもある意味事前復興なんですね。要は事前に備えておきましょうって話ですから、その中でもやはりうちの黒潮町の防災対策の筆頭は教育なんですね、教育啓発です。やはり町は人でできてますから、人がやはり何でも動くんです。逃げる人、助ける人、人がすべて主役です。なので、教育というのが意味もうほんとに基本で、その教育が強くなるためにやはり地域と学校の連携ということが、これがもうどうしても欠かせないですね。

なかなか学校からは、時間の制約とかいろんなことがあって地域の方々のほうへ出向くことは少ないですけども、ぜひ地域から学校に乗り込んでいってください。これ僕、教育委員会におりますので保証します。そのことで学校が拒否する学校は今1校もありません。学校が言うてこないじゃないんですよ。学校はなかなか忙しくてよう出ていかないと、いろんな事情があって来ないだ



けの話なので、学校に乗り込んでいって「先生たち、もうちょっとわしらと防災教育やれえ」と。「このままじゃ子ども助からんぜ」というぐらいの勢いでぜひ学校に乗り込んでいって、学校と地域、それから保護者、こころ辺りがちとスクラムを組むことによって、先ほど言いました防災にも強いということは、まちづくりのコミュニティがしっかりするということですね。そうすると、例えばちょっと弱っ

てきた祭りが元気になるかもしれないし、地域の安全とか、いろんな面での安全とかにぎわいとかそういうものがもっと強化されるはずだと思うんです。

ぜひそこら辺も皆さんにお願いをしながら、実は今日は全くシナリオがゼロでして、お聞き苦しかったかもしれませんし、またパネリストの皆さんは突然の質問にかなり苦慮をされたようでございますけれども、これで私の進行は終わらせていただきたいと思います。最後までご清聴ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。最後に、畦地さんのほうで本シンポジウムをまとめるようなお言葉をいただきました。非常に貴重なお話をいただいたというふうに思ってます。教育ということを今回1つの柱に据えてのシンポジウムとなりましたが、それぞれ考えていただけるきっかけになるようなシンポジウムであればいいなというふうに思ってます。

最後に、貴重なお話いただいた4人の皆様方に再度全体の拍手でお礼に代えていきたいと思えます。どうもありがとうございました。

それでは、当センターとしましては、この「東日本大震災から高知は学ぶ」という連続シンポジウム、今回6回目になってますが、また来年も次回7回目も開催するように計画をしております。ぜひ皆さんご参加をいただきたいということをお願いしまして、このシンポジウムを終了していききたいと思います。本日はご参加いただきまして誠にありがとうございました。





